

42505

教科書文庫

4
810
44-1941
200030
2112

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

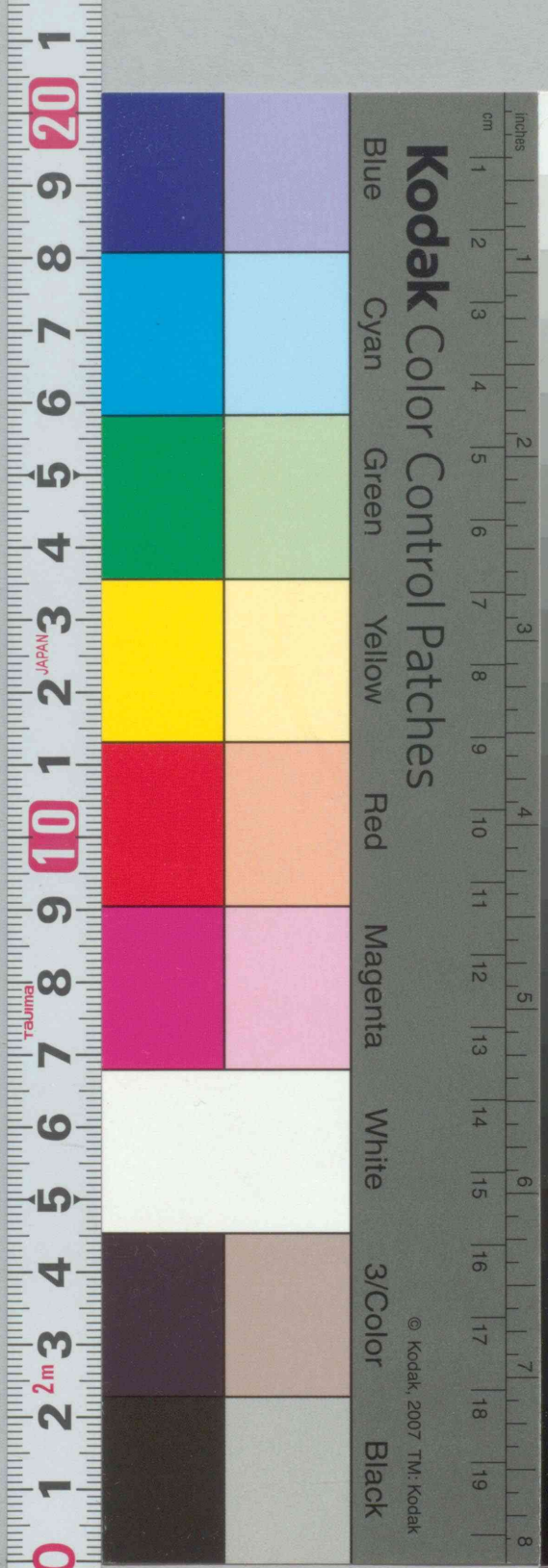


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

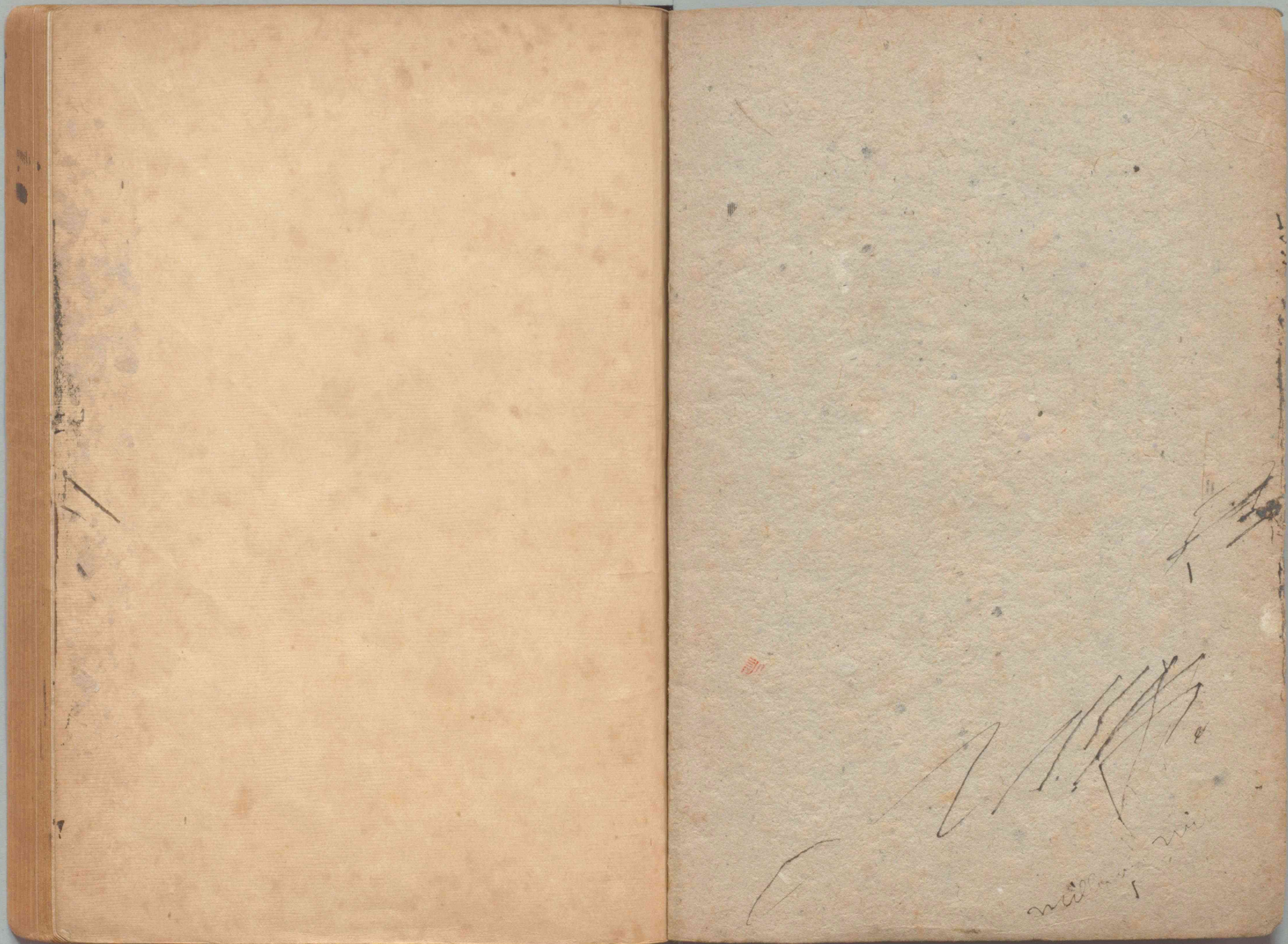


375.9  
Ha7  
資料室

帝國實業讀本  
改制新版  
卷九









文部省檢定濟

昭和十六年十月三日 實業學校國語科

教科書文庫

4

810

44-1941

2000302112

# 帝國實業讀本

改制新版

中等學校教科書株式會社

文學博士 芳賀矢一 編  
文學博士 上田萬年  
文學士 長谷川福平 訂補

広島大学図書

2000302112



資料室

375.9  
Ha7

千早あさ  
沖の時代より  
日の本への  
國のつめ  
立石の山

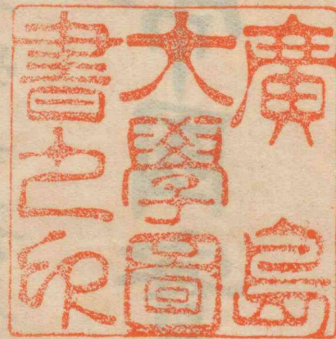




池田の宿

松岡映丘筆

文政書局印



松岡映丘筆  
池田の宿

中平島外史并書村人會

文政書局



帝國實業讀本 改制新版 卷九

目次

一 詩 興……………	夏目漱石……………一
二 春 興(朗詠)……………	……………七
三 國語の變遷……………	吉澤義則……………一〇
四 神武天皇と後醍醐天皇……………	幸田露伴……………一九
新葉集の歌(自修文)……………	大町桂月……………二五
五 大原御幸その一……………	(平家物語)……………二九
六 大原御幸その二……………	(平家物語)……………三三
七 一系の天子(俳句新調)……………	……………三七
八 國學と日本精神その一……………	河野省三……………四



九	國學と日本精神その二	河野省三	三〇
一〇	澁澤榮一の生涯	佐治祐吉	三二
二	わが教へ子に戒めおくやう	本居宣長	六六
	新たなる説を出すこと		六六
	師の説になづまざること		六六
	わが教へ子に戒めおくやう		六七
三	みくにまなび	平田篤胤	七三
	逆境の恩寵(自修文)	加藤玄智	七五
三	御堂關白	(大鏡)	八一
四	東下り	(伊勢物語)	八四
五	世界の四聖	高山林次郎	八八
六	千里が竹	近松門左衛門	九七
	教化上より見た近松(自修文)	藤村作	一〇六

一七	南阿の獅子	澤田謙	一一〇
一八	落花の雪	(太平記)	一一〇





小説家。名家は  
市助。東大は  
十五年。大正五

# 帝國實業讀本 改制新版 卷九

## 一 詩 興

夏目漱石

山路を登りながらかう考へた。  
智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。

住みにくさが高ずると、心安い所へ引越したくなる。どこへ引越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れ、晝が出来る。  
人の世を作つたものは、神でもなければ鬼でもない。やはり向ふ三軒兩隣にちらく／＼する唯の人である。唯の人が作つた人の世が住みにくいからとて、引越す國はあるまい。あれば人てなしの國へ行くばかりだ。人てなしの國は、人の世よりもなほ住みにくからう。

一 詩 興



越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれ程か  
寛げて、束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ。茲に詩人  
といふ天職が出来、茲に畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士  
は、人の世を長閑にし、人の心を豊かにするが故に尊い。

住みにくい世から住みにくい煩を引抜いて、有難い世界をまの  
あたりに寫すのが詩である。畫である。或は音樂、彫刻である。細かに  
言へば、寫さないでも、唯まのあたりに見れば、其所に詩も生き、歌も  
涌く。著想を紙に落さずとも、鏗鏘かうきやうの音は胸裏に起り、丹青を畫架に  
向つて塗抹せずとも、五彩の絢爛はおのづから心眼に映る。唯おの  
が住む世をかく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに澆季濁濁の俗界を  
清く麗かに收め得れば足りる。この故に無聲の詩人には一句なく、  
無色の畫家には尺練せきれんなくとも、かく人生を觀じ得る點に於て、かく  
煩惱を解脱し得る點に於て、かく清淨界に出入し得る點に於て、我

鏗鏘の音

靈臺  
澆季

尺練

利私慾の羈絆を掃蕩し得る點に於て、あらゆる俗界の寵兒よりも  
幸福である。

忽ち足の下で雲雀の聲がしだした。谷を見おろしたが、どこで鳴  
いてゐるか影も形も見えぬ。唯聲だけが明らかに聞える。せつせと  
せはしく、絶間なく鳴いてゐる。方幾里の空氣が一面に蚤に刺され  
て、ゐたゝまらないやうな氣がする。あの鳥の鳴く音には瞬時の餘  
裕もない。長閑な春の日を鳴きつくし、鳴きあかし、また鳴きくらさ  
なければ氣が濟まぬと見える。その上どこまでも登つて行く。いつ  
までも登つて行く。雲雀はきつと雲の上で死ぬに相違ない。登り詰  
めた擧句は流れて雲に入つて漂うてゐるうちに、形は消えてなく  
なつて、唯聲だけが空のうちに残るのかも知れない。

横を見下すと、菜の花が一面に見える。雲雀はあすこへ落ちるの  
かと思つた。否、あの黄金の原から飛上つて來るのかと思つた。次に



は落ちる雲雀と上る雲雀とが、十文字にすれ違ふのかと思つた。最後に、落ちる時も、上る時も、また十文字にすれ違ふ時も、元氣よく鳴き續けるだらうと思つた。

春は眠くなる。猫は鼠を捕る事を忘れ、人間は借金のある事を忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて、正體がなくなる。唯菜の花を遠く望んだ時に眼が醒める。雲雀の聲を聞いた時に魂の在所が判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない。魂全體が鳴くのだ。魂の活動が聲に現れた物のうちで、あれ程元氣のある物はない。ああ愉快だ。かう思つて、かう愉快になるのが詩である。

忽ちシ(一)リーの雲雀の詩を思ひ出して、口の中で覺えた所だけ語(二)誦してみたが、覺えてゐる所は二三句しかなかつた。

前を見ては、しりへを見ては、物ほしとあこがるゝかな、われ。腹からの笑と言へど、苦しみのそこにあるべし。美しき極みの歌に、悲

(一)イギリスの詩人。(西紀一七九二年)一八二二年  
(二)雲雀に寄する賦。

萬斛の愁

何食はぬ和  
尚の顔や河  
豚汁  
漱石

しさの極みの想籠るとぞ知れ。

成程、いくら詩人が幸福でも、あの雲雀のやうに思ひ切つて、前後を忘却して、一心不亂に我が喜を歌ふ譯にはゆくまい。

西洋の詩は無論の事、支那の詩にも、よく萬斛の愁などといふ辭がある。詩人に憂は附物かも知れないが、あの雲雀を聞く心持にな

何食はぬ和尚の顔や河豚汁

蹟筆石漱目夏

れば、微塵の苦もない。菜の花を見ても、唯嬉しくて、胸が躍るばかりだ。かう山の中に来て自然の景物に接すれば、見る物も聞く物も面白い。面白いだけで、別段苦しみも起らぬ。

苦しみのないのは何故であらう。唯この景色を一幅の畫として観、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は、地面



醇乎として醇

をもらつて開拓する氣にもならねば鐵道を架けて一儲する料簡も起らぬ。唯この腹の足しにもならぬ景色が、景色としてのみ余が心を樂しませるから、苦勞も心配も伴なはぬのであらう。自然の力は是に於てか尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して醇乎として醇なる詩境に入らしめるのは自然である。

苦しんだり、怒つたり、騒いだり、泣いたりするのは、人の世に附物だ。余の欲する詩は、そんな世間的の人情を鼓舞するやうなものではない。俗念を放棄して、暫くでも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも、人情を離れた芝居はない。理非を絶した小説は少からう。どこまでも世間を出る事の出来ぬのがその特色である。殊に西洋の詩になると、人事が根本になるから、いはゆる詩歌の純粹なものも、この境を解脱する事を知らぬ。嬉しい事に東洋の詩歌には、其所を解脱したのがある。

解脱

(一)晉の處士陶淵明の詩。

採菊東籬下。

悠然見南山。

出世間的

(二)唐の詩人王維の詩。

獨坐幽篁裏。

彈琴復長嘯。

別乾坤

唯二十字のうち、優に別乾坤を建立してゐるのである。

深林人不知。

明月來相照。

—草枕—

二春興

春興

野草芳菲紅錦地 遊絲繚亂碧羅天

劉禹錫

も、しきの大宮人は暇あれや

さくらかざしてけふもくらしつ

山部赤人

(三)唐の詩人。字は夢得。會昌二年(西紀八四二年)歿。七十一といふ。



春夜

背燭共憐深夜月 踏花同惜少年春  
はるの夜の闇はあやなし梅の花

白居易 河内躬恆

納涼

池冷水無三伏夏 松高風有一聲秋  
したくゞる水に秋こそ通ふらし

源英明

むすぶ泉の手さへすゞしき

中務

杜鵑

一聲山鳥曙雲外 萬點水螢秋草中  
さつきやみおぼつかなきを杜鵑

許渾

なくなる聲のいとゞ遙けき  
ゆきやらで山路くらしつ杜鵑

明日香王子

(一)平安時代の文人。第五十九代宇多天皇の子。齊世親王の第二子。九十九年(延喜二十三年)歿。  
(二)平安時代の宮女。第四多天皇の母。是親王の勢部。唐の詩人。字は用晦。  
(三)第五十代桓武天皇の皇子。承和元年(九四四年)薨。

(一)平安時代の歌人。天曆二年(六〇八年)歿。年六十。

(二)平安時代の文人。菅原道真の門人。延喜二十二年(七五〇年)歿。年五十八。  
(三)平安時代の歌人。永觀元年(一〇三三年)歿。年七十三。

いま一聲のきかまほしさに

源公忠

八月十五夜

三五夜中新月色 二千里外故人心  
十二廻中無勝於此夕之好

白居易

千萬里外皆爭於吾家之光

紀長谷雄

水の面にてる月なみを數ふれば

源順

こよひぞ秋のもなかなりける

雪

雪似鷺毛飛散亂 人被鶴氅立徘徊  
雪ふれば木ごとに花ぞ咲きにける

白居易

いづれを梅とわきて折らまし

紀友則

餞別



(一)平安時代の儒者、書家、第百二十代村上天皇に仕へた。天徳元年(一〇七〇年)歿。  
(二)平安時代の儒者、冷泉天皇に仕へた。天徳元年(一〇七〇年)歿。

(三)平安時代の文藝家、書家、入道して寂心といつた。長徳三年(一〇七〇年)歿。

(四)國文學者、文藝博士。京都帝國大學教授。生れた。愛知縣に

前途程遠、馳思於雁山之暮雲、  
後會期遙、霑纓於鴻臚之曉淚、  
おもひやる心ばかりはさはらじを  
なにへだつらん峯のしら雲

祝

嘉辰令月歡無極、  
長生殿裏春秋富、  
君が代は千代にやちよにさゞれ石の  
いはほとなりて苔のむすまで

大江朝綱  
橘直幹  
源英明  
慶滋保胤  
よみ人知らず

三 國語の變遷

言語は絶えず變化してゐる。しかしその變化は急劇に現れるものではなく、極めて徐々に連続的に行はれて行くものである。随つ

吉澤義則

國語の變遷  
特色  
時代別

て國語の歴史に就いても、その時期區分をする事は頗る困難である。紀元何年を境として、それ以前がどう、それ以後がどうといふやうな明確な區分は、勿論出來る事ではない。しかし、我々は國語の變遷の迹を通覽する時に、臚氣ながらも或色の濃い部分と他の色の濃い部分とがあるやうに感ずる。その境界はぼかされてゐて、何所と明確には指し難いけれども、その色の濃いと思はれる部分々々を中心として見れば、やはり或程度までは時期の區分が出來るやうに思はれる。さうして、その區分は史料の少い奈良朝以前はさておいて、それ以後を大體上古奈良朝時代、中古平安朝時代、近古鎌倉室町時代、近世江戸時代、現代(明治以後)といふやうに、政治史のそれに準據しても、甚だしく不自然ではないやうである。畢竟政治上の變革、政治の中心の移動は、人心の動搖を招致するものであり、人心の動搖は言語の上に反映せずには已まないからである。左に國語



變遷の迹を大觀してみよう。

奈良朝時代は漢文學や佛教も盛であり、制度、文物すべて外國のものを取入れるに急な時代であつたから、外來語の國語に取入れられた數も非常に多かつた事と思はれるが、歌の上にはあらはれたものは極めて少い。散文の中には割合に多く見えるが、それもすべて名詞としての資格を與へられてゐるものばかりである。我が國語には限らないが、外來語の輸入は、殆どその國語の語彙を富ますだけで、語法までも影響を受ける事は極めて少いものである。

平安朝時代は平安奠都から約四百年、政治の中心が鎌倉に移るまでの間である。前代に引續いて重んぜられた漢文學が一時全盛を極めた結果として、和歌の暗黒時代を現出したが、漸く國粹に目覺めては和歌の復興となり、遂には「古今集」の敕撰とまで展開して行つた。平假名片假名は萬葉假名から脱化して、國語の表記は愈、便

國語の語彙

萬葉假名

〔第六十一代〕

利になつた。そこに散文の文學が發達し、國語は愈、精鍊された。

和歌の用語は、前代から或意識をもつて選ばれたのであるが、この時代になつては愈、限定されて、話語とは益、距離が出来た。たゞに和歌の用語ばかりでなく、散文の用語も、朱雀天皇の頃から次第に話語から離れる傾向を持つたらしい。この時代の末に至つては、この傾向は益、顯著となり、平安朝盛時の言語は、以後永く文語の標準となつたのである。

この時代の外來語も主として漢語であつて、前代の如く名詞としてばかりでなく、形容詞、動詞、副詞等にも用ひられてゐる。なほそれ等は殆ど國語化した姿をもつて、物語などに現れてゐる。

この時代の末はいはゆる院政時代である。この頃になると、促音便やバ行四段、マ行四段の動詞の長音便があらはれ、二段活用の一、段化の傾向も稍強くなり、また連體形の終止形同化の傾向も生じ



て、次の時代に於ける大變化を豫想せしめてゐる。藤原氏の勢力が衰へ、武士が漸く實力を得始めた。事などから、地方語が京都語に影響する事が多くなつた結果であらうと言はれてゐる。

鎌倉室町時代は鎌倉幕府時代、吉野朝時代、室町幕府時代を含んだ約四百年間で、要するに武士の跋扈した時代である。この時代は概して言へば、戦亂が多く、人心は定まらず、學問、文藝は不振の時代であつた。文語と話語との懸隔は益甚だしくなつたが、その文語も、和歌はとにかく、散文に至つては、完全に前代のものを模し切る事が出来ないで、所々に當時の話語の面影をのぞかせてゐる。一方にはまた、漢文脈を多分に取入れた和漢混淆の文章が發達して、漢語の國語に入り來るものは愈多くなつた。漢語はかうした文字の上から移植された外に、この時代には、主として禪僧によつて、直接支那から輸入されたものが少くない。例へば、普請、行燈の類である。

江戸時代は江戸幕府の時代約三百年間で、戦亂が既に收り、人々が太平を樂しんだ時代である。この時代は室町時代の言語を承けて、話語の整理された時代といふべく、動詞では「落つる」「受くる」等の二段活用の形は漸次滅亡して、「落ちる」「受ける」等の一段活用に統一され、音便では「忍うて」「頼うて」など、バ行四段、マ行四段の長音便が廢退して、「忍んで」「頼んで」などの撥音便が進出し、關東語が勢力を得て後は、「流いて」の如きサ行四段のイ音便は、もとの形に還元された。助動詞「よう」「未來」「です」「指定」などの發達もあるが、三百年を通じて、概しては甚だしい變化を見ない時代である。方言では、江戸の發展と共に江戸言葉が發達し、次第に勢力を得て、文藝上では、今まで關西方言に虐げられてゐた關東方言の爲に氣を吐くに至つた。江戸時代の文語は、大體に於て前代の繼承であつたが、元祿頃から振ひ起つた國學者は、雅馴な古への國語に憧れて、その國語相を己等の時代



に再現しようとしてまで努力した。しかし、一方にはまた國語に無關心な漢學者があつて、その漢籍の読み方が國語を混亂せしめた事も多かつた。

明治の普通文は、實に漢文讀み下しの影響を受けたものであつたのであるが、明治二十年代から動き始めた言文一致更生の機運は、花を開き實を結び、種々の試鍊彫琢を経た結果、大正時代に入つては、威嚴の不足感から容易に採用されなかつた新聞の論說などにまで採用されるやうになつて、文語文は次第に影を潜めて來た。外國語や外國語格を取入れる事は、國語を豊富にし、表現に新しみを加へる利點もあるが、その濫用は國語の純正を害するもので、嚴に戒めなければならぬ事である。名山、名川には日本アルプスとか、日本ラインとか外國名をつけ、國産品にも片假名で西洋流の名をつけて得々としてゐる現在、誠マコトに外國語濫用の時代だと言は

れよう。我等の周圍には、西洋風の名をつけた物が如何に多くある事か。これでは既に精神的に彼等に屈服してしまつてゐると言ふべきで、世界諸國の上に立つて、世界の文化を指揮する事はまだまだ前途遼遠であらう。

さて國語は上述の如く、それ自身の動きにより、また外國語を取入れる事によつて幾變轉した。しかし、その根柢の本質は少しも變つて居らぬ。どこまでも我等の祖先の精神がその中に生活したところの國語である。東西二大方言の中にも、また多くの小さな方言を有する。しかし、それも畢竟根幹を得て茂る枝葉である。我等は今もその中に住して、縦には祖先の心を受け、横には同胞相結ぶのである。國語は實に一國の標識であり、國體を維持し、國民を結合する精神的の鎖である。これを世界の歴史に見るに、一國の國語の消長は、その國の國勢の消長に緊密な交渉をもつてゐる。故に我等は現



代の外國語濫用を悲しむと共に、方言の統一が速に行はれぬ事も悲しまねばならぬ。方言は國語の表面だけの相違ではあるにしても、その相違は國語の力を殺ぐ事が極めて大きいのである。而して方言の統一は、學校に於ける國語教育だけで出来るものではない。新聞、雜誌、文學作品等も與つて力はあるもの、なほそれだけでは出来るものでない。要は國民全體の自覺と努力とに俟たねばならぬ。

現在は、大體東京語が標準になつてはゐるが、未だ標準語の問題は明確に具體的に解決されては居らぬ。方言統一に向つて進むに方つて、先づ必要な道標は標準語でなければならぬ。更に國語を純正ならしめるには如何にすべきか。漢字と共に取入れられた無數の漢語、近世以後取入れられた多くの歐米語、これ等の整理を如何にすべきか。假名遣を如何にすべきか。これ等はすべて國民全體の

自覺に俟たねば解決されぬ事がらである。國語の愛護。それが一部の學者にのみ唱へられて、未だ國民全體の聲とならぬのを悲しむ。

—國語史概説—

#### 四 神武天皇と後醍醐天皇

幸田露伴

申すもいと畏けれど、我が國創業の御門神武天皇、(一)孔舎衛坂の戦に御兄君五瀬命を敵の矢の爲に失ひ給ひて、甚だしく御憤懣あらせられ、誓つて長髓彦に天誅を加へんとし給ひし御時は、いかに勇猛壯烈に、大御心の思し給ひしがまゝ、を御製に述べ給ひしぞや。

みつゝし 久米の子等が  
粟生には かみら一もと  
そねがもと そねめつなぎて  
撃ちてしやまん

(一)文學者、文學博士。名は成行。慶應三年(二五二七年)江戸に生れた。  
(二)直越とも言ふ。大阪府(河内郡)から中河内郡越えて奈良縣生駒郡生駒町に至る坂路。  
(三)大和國鳥見の酋長。一名登美毘古。



と謠ひ給ひ、また

神風の 伊勢の海の

大石に はひもとほろふ

細螺の いはひもとほり

撃ちてしやまん

と謠ひ給ひ、また

みつゝし 久米の子等が

垣本に 植ゑしはじかみ

口ひやく 我はわすれじ

撃ちてしやまん

と謠ひ給へる御威勢の激しき御心の猛々しき、薑を食へば餘味ここにありて、我が口こゝに疼む。我が兄既に撃たれぬ。我が心なほ痛む。忘れんや。忘れんや。おのれ醜虜、撃ち屠らてはいかてか止まん」と、

久米の子等が

御目に觸れし薑に御情を寄せ給ひて、御言葉のあやをなし出で給へる、屑しなど申すも畏き御製なり。

建武中興の御門後醍醐天皇は、これした申すも畏けれど、英明にわたらせ給ひし御門なり。されどその御製の御心御姿は、世の異なるが爲もあるべけれど、いたく神武天皇のとは様異なり。

ノ 秋ごとのならひと

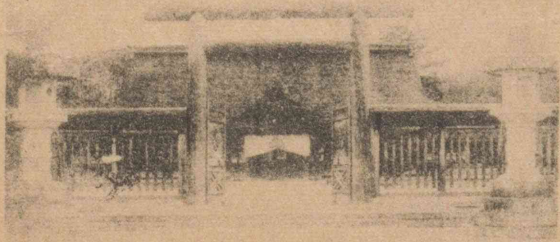
思ひし露しぐれ

ことは袖の

上にぞありける

と詠じ給へる、

よまだなれぬ板屋ののきのむら時雨



宮 神 原 櫓



おとを聞くにもぬる、袖かな

と遊ばされたる、臣子の分としては、我が日の本の天皇のかゝる御詠ありしかと思へば、恐ながら御傷はしさに涙はふり落ち、かゝる

御詠のありたるその世いと恨めしく口惜し。また

うづもるゝ身をば

なげかずなべて世の

くもるぞつらき

けさのはつ雪

雪



後醍醐天皇

て、これまた涙止めあへず。

身にかへて思ふと、だにも知らせば

の御製は、大御心の深く廣き、愚かなる身にも大凡は推量り奉られ

たみの心の治めがたさを

の御製は、聖意いと畏く、恐多き極みの御詠なり

ももの思はて過ぎ

ぬる方の年月は

いかに寝し夜の

夢にかあるらん

と懐舊の情を詠み給ひたる、吉野の行宮

にていかなるをりにか、

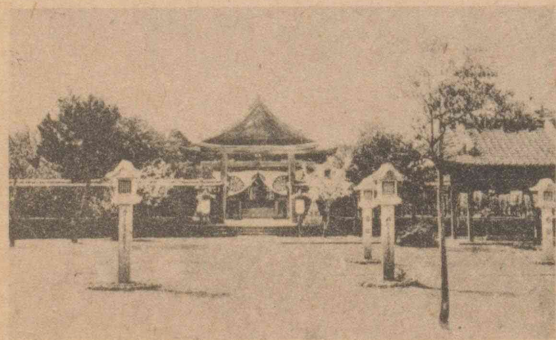
しあだに散る花を

思のたねとして

この世にとめぬ

こゝろなりけり

と感慨し給ひたる、同じ行宮にて御風邪めしたる時、



吉野神宮







つひの御やどり

最後の御宿。  
後醍醐天皇の御陵。塔尾陵と稱する。如意輪寺の近傍。

第九十七代。

たゞかりそめの宿とおもふに

これ後醍醐天皇の御製なり。吉野の世尊寺に「雲居の櫻」と稱する櫻あり。雲居は禁中を言ふ。さらでだに舊禁中のこひしくして堪へ給はざるに、吉野山中「雲居」と稱する櫻を御覽じては、豈叡感無量ならざるを得んや。悲しいかな、かりそめの御やどりつひの御やどりとなりて、延元陵畔、永へに游人をして涙襟を潤ほさしむ。

雲居櫻



これ後村上天皇の御製なり。山櫻を土産にして京都に還らせ

吉野山花も

時得て咲きにけり

みやこのつとに

今やかざさん

給ひし時の御嬉しさはさぞと思はるれど、やがてまた京都を保ち給ふ事能はずして、再び吉野に赴かせ給ひし時の御失望やいかなりけん。

わが宿と頼まずながら吉野山

花になれぬる春もいくとせ

これ長慶天皇の御製なり。後醍醐天皇の皇孫、後村上天皇の皇子、吉野の山中に人となり給ひけん。父祖の御遺志を嗣ぎ給はんの御志切なれども、事終に御志とかなはざりき。されど知らず、京都は果して御心にかなひたる御宿なりしか。この天皇の御母を嘉喜門院と申しまつる。その御歌に、

櫻花さきて疾く散るならひこそ

わが身の春のものおもひなれ

昨日は紅顔、今日は白頭、人生の老いやすきは、男子とても悲歎に堪へざるに、まして女性にょしやの御身、櫻花の散りやすき様を見給ひ

花に云々  
花となじみに  
なつた春はど  
れ程であらう  
か、もはや長  
い間此所に春  
を迎へた。

後村上天皇の女御。



雅懷  
風流な心持

(一)二〇三七年。

そのかみ  
その當時の意  
此所では後村  
上天皇御在世  
中のこと

て、いかに御身をはかなく思し給ひけん。

故里はこひしくとてもみ吉野の

はなのさかりをいかゞ見すてん

これ新葉集の撰者なる宗良親王の御歌なり。詩人の雅懷がくわいを見  
る。されど散らばまたいかに都のこひしかるらん。

嘉喜門院は歌を善くし給ふのみならず、最も琵琶に長じ給へ  
り。されど後村上天皇崩御の後、悲哀に堪へず、誓つて琵琶を弾  
き給はざりき。然るに天授三年七月七日、吉野の行宮にて樂を張  
り給ひけるが樂終りて後、長慶天皇、門院に向ひて一曲をと切に  
乞ひ給ひければ、門院も恩愛の情にほだされて、琵琶を弾き給ふ。  
その時の御製に、

かくてのみ絶えず聞かばやそのかみの

秋おもほゆる峯のまつかぜ

昔は父天皇この琵琶を聽きて御心を慰め給ひけん。父天皇今

御返し  
御返歌のこと  
普通返歌には  
返しと言ひ、  
文には返りと  
言ふ。

君

長慶天皇。

ふきたえぬべ

き 吹絶えてしま

ひさうな。

唱和

五に詩や歌で  
問答すること。

はおはせず、母君の琵琶が亡き父天皇の形見なり。門院の御返し  
に、

あはれとも君ぞ聽きける今ははや

ふきたえぬべき峯のまつかぜ

「わが餘命いくばくもなし。君が昔をしのぶといふ琵琶の音も、や  
がて聽き給ふに由なかるべし」となり。二首何れも意哀れにして、  
詞も妙たなり。宗良親王これを評して、古への敕撰集中の唱和に比  
して毫も遜色なしとて、これを新葉集に收め給へり。

作文五十講

(一)第七十七代。  
(二)第八十二代後  
鳥羽天皇の御  
年(一八四六)

五 大原御幸 その一

後白河法皇は文治二年の春の頃、建禮門院の大原の閑居の御す  
まひ御覽ぜまほしう思し召されけれども、如月彌生の程は嵐はげ

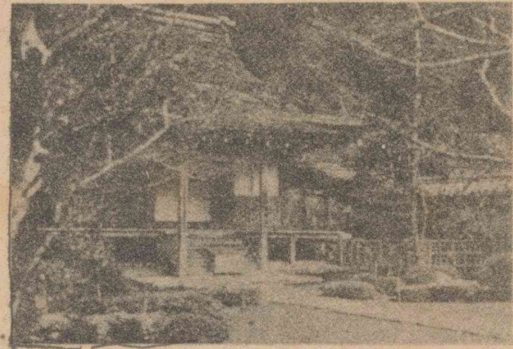


つら、  
夜をこめて

(一)大納言兼雅。

(二)權中納言源通親。

(三)「まがふとて  
厭ひし峯の白  
雲は散りて花  
の形見なり  
ける二續後撰  
集、久我後撰  
政大臣」



寂光院

しう、餘寒も未だ盡きず、峯の白雪消えやらで、谷のつら、もうち解  
けず。かくて春過ぎ夏立ちて、北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて、大  
原の奥へ御幸なる。しのびの御幸なりけ  
れども、供奉の人々には後徳大寺、花山の  
院、土御門以下公卿六人、殿上人八人、北面  
少々さぶらひけり。  
遠山にかゝる白雲は、散りにし花の形  
見なり。青葉に見ゆる梢には、春の名残ぞ  
惜しまる。頃は卯月二十日餘りの事な  
れば、夏草の茂みが末を分入らせ給ふに、  
初めたる御幸なれば、御覽じなれたる方  
もなく、人跡絶えたる程も思し召し知られて哀れなり。  
西の山の麓に一字の御堂あり、即ち寂光院これなり。舊う造りな

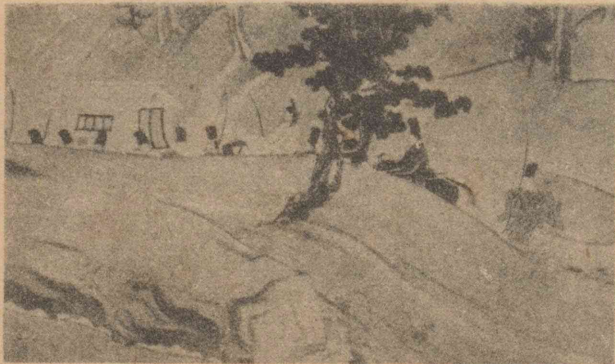
よしある様

(一)「夏山の青葉  
まじりの遅櫻  
初花よりも珍  
しきかな二金  
葉集、藤原盛  
房」

せる泉水木立、よしある様の所なり。いらか破れては霧不斷の香を  
焼き、樞落ちては月常住の燈をかゝぐ。と  
は、かやうの所をや申すべき。庭の若草茂  
り合ひ、青柳絲を亂りつゝ、池の浮草波に  
漂ひ、錦を晒すかとあやまたる。中島の松  
に懸れる藤波の、うら紫に咲ける色、青葉  
まじりの遅櫻、初花よりも珍しく、岸の山  
吹咲亂れ、八重立つ雲の絶間より、山杜鵑  
のひと聲も、君の御幸を待ち顔なり。法皇  
これを觀覽あつて、かうぞあそばされけ  
る、

池水にみぎはの櫻ちりしきて

なみの花こそさかりなりけれ



(筆山觀村下) (一のそ) 幸御原大



ゆゑに  
はるかなる  
うらみ

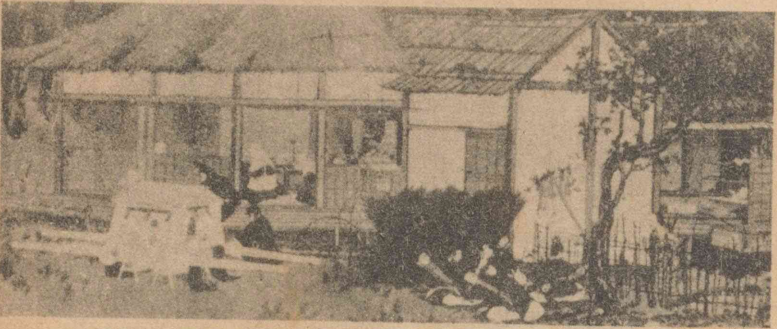
(一)橋直幹の詩  
(和漢朗詠集)  
(二)孔子の弟子  
字は子思。

ふりにける巖の絶間より落來る水の音さへゆゑびよしある所な  
り。綠蘿の垣翠黛の山繪にかくとも筆も及び難し。  
さて女院の御庵室を徹覽あるに軒にはつた朝顔はひかゝりし  
のぶまじりの忘草瓢箪屢空し草顏淵が巷に滋く藎藿深く鎖せり、  
雨原憲が樞を濕すとも言ひつべし。杉のふきめもまばらにて時雨  
も霜も置く露も漏る月影に争ひてたまるべしとも見えざりけり。  
後は山前は野邊いさゝ小笹に風騒ぎ世に立たぬ身の習とて憂き  
節しげき竹柱都の方の音づれば間遠に結へるませ垣や僅かに言  
とふものとはは峯に木傳ふ猿の聲賤が爪木の斧の音これ等が音  
づれならではまさきのかづら青つゝら來る人稀なる所なり。

六 大原御幸 その二

法皇「人やあるく」と召されけれども御いらへ申す者もなし。稍

うら



大原御幸 (その二) (下村觀山筆)

あつて、老い衰へたる尼一人参りたり。女院  
はいづくへ御幸なりぬるぞと仰せければ、  
「この上の山へ花摘に入らせ給ひて候」と申  
す。さこそ世を厭ふ御習とは言ひながら、さ  
やうの事に仕へ奉るべき人もなきに、御  
いたはしうこそと仰せければ、この尼申し  
けるは、五戒十善の御果報の盡きさせ給ふ  
によつて、今かゝる御目を御覽ぜられ候に  
こそ捨身の行になじかは御身を惜しませ  
給ひ候べき」とぞ申しける。  
この尼の有様を御覽ずれば、身には絹布  
のわきも見えぬ物を結び集めてぞ著たり  
ける。あの有様にても、かやうの事申す不思



信西の妻朝子

議さよと思し召して、抑、汝はいかなる者ぞ」と仰せければ、この尼さ  
めざめと泣いて、暫しは御返事にも及ばず、稍あつて涙を抑へて、申  
すにつけて、憚り覺え候へども、故少納言入道信西が女、阿波の内侍  
と申す者にて候なり。母は紀伊二位、さしも御いとほしみ深うこそ  
候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へぬる程思ひ知  
られて、今更せん方なうこそ候へ」とて、袖を顔に押しあて、忍びあ  
へぬ様、目も當てられず、法皇げにも、汝は阿波の内侍にこそあんな  
れ。御覽じ忘れさせ給ふぞかし、何事につけても、唯夢とのみこそ思  
し召せ」とて、御涙せきあへさせ給はねば、供奉の公卿殿上人も、「不思  
議の事申す尼かなと思ひたれば、ことわりにて申しけり」とぞ、各感  
じあはれける。

さて彼方此方を窺覽あるに、庭の千草露重く、籬に倒れかゝりつ  
つ、外面の小田も水越えて、しぎたつひまも見えわかず、さて女院の

手向の花



岩田正己筆



(一)彌陀、觀音、勢  
至の三尊。  
(二)文殊と共に釋  
迦佛に侍する  
菩薩。  
(三)支那唐代の名  
僧。  
(四)第八十一代安  
徳天皇。

綾羅錦繡

花がたみ

御庵室に入らせおはしまし、障子を引きあけて、叡覽あるに、一間に  
は來迎の三尊おはします。中尊の御手には五色の絲を懸けられた  
り。左に普賢の繪像、右に善導和尚並びに先帝の御影を懸けられた  
り。蘭奢の匂に引きかへて、香の煙ぞ立ちのぼる。さて傍を叡覽ある  
に、御寢所と思しくて、竹の御竿に麻の御衣、紙のふすまなど懸け  
られたり。さしも本朝漢土のたへなるたぐひ數を盡し、綾羅錦繡の  
装も、さながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の  
公卿、殿上人も、まのあたり見奉りし事ども、今のやうに覺えて、皆袖  
をぞ絞られける。

稍あつて、上の山より濃き墨染の衣著たりける尼二人、岩のかけ  
ちを傳ひつゝ、おりわづらひたる様なりけり。法皇、あれはいかなる  
者ぞ。と仰せければ、老尼涙を抑へて、花がたみ臂にかけ、岩つゝ、じ取  
具して持たせ給ひて候は、女院にてわたらせ給ひ候。爪木にわらび



(一)藤原維實(ま)た伊實に作る  
伊通の子。永  
曆元年(一八  
二〇年)歿。年  
三十五。  
(二)藤原盛國の子。  
(三)平重衡の妻。

閑伽の水

撮取  
十念

折りそへて持ちたるは鳥飼中納言維實が女、五條大納言國綱の養子、先帝の御乳母大納言典侍局(三)と申しもあへず泣きにけり。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人も、皆袖をぞぬらされける。女院は世を厭ふ御習と言ひながら、今かゝる有様を見え参らせんずらん恥づかしさよ消えも失せばやと思し召せども、かひぞなき。宵々毎の閑伽の水、掬ぶ袂も萎るゝに、曉起の袖の上、山路の露も繁くして絞りやかねさせ給ひけん、山へもかへらせ給はず、また御庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせましましたる所に、内侍の尼参りつゝ、花がたみをば賜はりけり「世を厭ふ御習、何か苦しう候べきはや」御見参あつて、還御なし参らせ給ひ候へ」と申されければ、女院御涙を抑へて、御庵室に入らせおはします。一念の窓の前には、攝取の光明を期し、十念の柴の樞には、聖衆(四)の來迎をこそ待ちつるに、思の外の御幸かなとて、御見参ありけり。

—平家物語—

七一系の天子  
元日や一系の天子富士の山

鳴雪

夕日ぐゆる  
松の枝の  
雪

蹟筆雪鳴

氷とけて古藻に動く小海老かな  
春風や役者乗せたる葛籠馬

子規  
松宇

いづれあはれ  
月夜に  
雑魚わか

蹟筆規子

春雷や家遠く見ゆる野路かな

虚子

(一)内藤素行。松山市の人。漢詩をも善くした。大正十五年歿。年八十七。  
夕月や納屋も既も棟の影  
鳴雪  
(二)伊藤半次郎。俳人、實業家。安政六年(二五一年)信濃國(長野縣)に生れた。  
ひきあみやなきさの月に雑魚わか  
子規



(一)河東乘五郎。愛媛縣の人。昭和十二年歿。年六十六。

門川に流れ藻絶えぬ五月哉

碧

(二)尾崎徳太郎。小説家。東京市の人。明治三十八年(一九二一年)歿。年六十四。

雨來らむと  
して頻にあ  
かる花火哉

紅葉

(三)角田眞平。政治家。實業家。静岡縣の人。大正八年歿。年六十四。

うりもみや  
組板ならす  
女房ふり  
竹冷

五月雨やからす草踏む水の中

(一) 碧梧桐

門川に流れ藻絶えぬ五月哉

蹟筆桐梧碧

炎天の小さきつむじや豆ばたけ  
釣るゝとも見えぬ小舟や行々子

(二) 井泉水  
紅葉

雨來らむと  
して頻にあ  
かる花火哉

蹟筆葉紅

夕立や金鼓山河を動かして

(三) 竹冷

うりもみや  
組板ならす  
女房ふり  
竹冷

蹟筆冷竹

(一)村上莊太郎。慶應義塾(二)野田群馬縣(三)大野豊太。醫師。大正二年歿。年四十四。

海鼠と何汝  
のほとけ

(四)大谷正信。醒雪。文學者。昭和五年歿。年十九。

三十三間堂  
の雨

(五)松瀬彌三郎。酒。明治二年(一九一五年)歿。年六十四。

(六)藤井乙男。文學者。京都帝國大學文學部教授。明治二十八年(一九一五年)歿。年五十八。

秋

露涼し形あるものみな生ける  
樂書の扇に残る暑さかな

鬼城  
醒雪

生あるは汝成併  
何のほとけ

蹟筆雪醒

立秋の大鐘つくや瘦法師  
一山にひびく魚板や秋ゆふべ

(四) 酒竹  
繞石

つげくらや三十三間堂の雨

蹟筆竹酒

朝寒の胸ふくらせし雀かな  
野分してけもなくすみぬ水や空  
落葉ふる音ひとしきり大伽藍

(五) 小波  
(六) 青々  
紫影



水いろの空  
開け行く雪  
の上

瓊音

(一)高田千郷、俳人。兵庫縣の  
人。昭和五年  
歿、年四十五。  
(二)沼波武夫、國  
文學者。名古  
屋市の人。昭  
和二年歿、年  
五十一。

笹の底山吹  
の落花叩け  
ども

乙字

(三)大須賀續、國  
文學者。福島  
縣の人。大正  
九年歿、年四  
十一。  
(四)大谷光演、前  
大谷本願寺管  
長。明三十八年  
都五三治八八  
市三五年(二二  
に生れた京二

蹟筆音瓊

北風に提げゆく網のしづくかな  
乾鮭のからついてゐる柱かな  
吹雪やんて月落葉松の上に出づ

蝶<sup>(一)</sup>衣  
漱<sup>(二)</sup>石  
瓊<sup>(三)</sup>音

蹟筆字乙

降りやみし吹きやみし夜のさゆるなり  
行く年やまことをまもる一心事

佛<sup>(四)</sup>字

おのりやみし吹きやみし夜のさゆるなり  
行く年やまことをまもる一心事

八 國學と日本精神 その一

河野省三

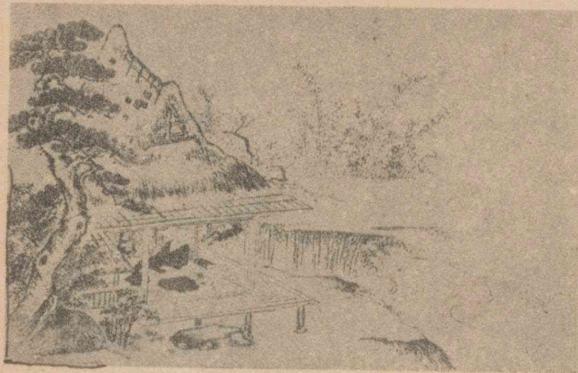
(一)倫理學者、文  
學院大學長。國  
明治十五年  
(二五四年)  
埼玉縣に生れ  
た。  
(二)儒者。幕府の  
儒官。名は貞  
幹。順里と號し  
は順庵と號し  
た。京都の人。  
新井白石の室  
鳩巢等は、その  
門から出た。  
元祿三十八年  
(一七五一年)  
歿、年七十八。  
(三)歌人、歌學者。  
駿河の人。從  
來の歌論を破  
壞し、近世歌  
學革新の第一  
聲を放つた。  
寶永三年(一  
七二六年)歿、  
年七十八。  
(四)國學者。吉  
江流の創始者  
で、道の人。吉  
神道の創始者  
で、幕府に仕へ  
た。元祿七年  
(一七〇二年)歿、  
年七十九。

元祿の頃はいはゆる諸道興隆の時期であつて、儒學には木下順庵、伊藤仁齋、荻生徂徠、貝原益軒等の大家が輩出し、文壇には井原西鶴の小説、松尾芭蕉の俳諧、近松巢林子の戯曲などが何れも新生面を開き、繪畫には菱川師宣、英一蝶、尾形光琳等がそれ／＼、時世を粧ひ、國文學にあつては契沖が古典に新研究を試み、北村季吟が舊來の諸註を集成し、戸田茂睡が新しい歌風を唱道した。それ等と相前後して、徳川光圀は彰考館を設けて大日本史、禮儀類典などの史籍を編纂し、新井白石は古史通、讀史餘論などを述作して史學の進歩を促し、また山崎闇齋、吉川惟足、眞野時繩等は神道を鼓吹して、敬神尊皇の精神を喚起した。

かういふ思想、文化共に活氣を帯びた元祿前後の社會は、一方に於て、天下の太平に馴れ、物質上の欲望に誘はれて、漸く緊張を缺く



國學者。尾張國津島神社元祿三年(一六八六)歿。



契沖(契沖全集所載)

やうになつたが、しかもまた他の一面にあつては、楠公崇拜の思潮も漸次に高まり、赤穂義士の快擧に忠節を尙ぶ風もまた強まつて來た。かくて質實剛健の氣風と、實際生活を重んずる學問とを獎勵した享保の政治に際會して、日本の社會はおのづから堅實な學風を要求するに至つたのである。かくの如く元祿の時代は豊富な内容を有してををつたので、茲に日本の社會は、各方面に互つて精神的展開を見る事が出來た。先づ史學の進歩と尙古の趣味とから、上代文學の研究が盛になり、それにより種々な思想と要求とが加つて、古典の闡明に力を用ひる學者が多

くなつて來た。次にその結果として、我が建國の精神や國體の精華が追々と明らかになり、昔から蒙つた外來思想の惡影響に對する反感も強まり、深い國家觀念が起るやうになつた。更にそれ等の關係から、史實に立脚した敬神崇祖の思想が涌起し、また上代人の性情、即ち我が日本人の有する本來の國民性に對して憧憬の情を深めるやうになつた。それから活氣に富んだ學界には、自然に忠實で自由な研究が試みられる事となつて、古語の意義も明らかになり、古典の精神も發揮されるやうになつて來た。それ等の關係から、我が上代日本人の快活で明るい心持が知られ、雄々しく大らかな氣分が認められたのであるが、一方に感情の解放を求め、他方に意志の訓練を必要としてゐた當時の武士や一般國民の間には、勢ひさういふ古典の思想と、和歌、國文の趣味とが比較的にたやすく受容れられるやうになつたのである。



かやうな種々の國內の事情と人心の要求とから、茲に一部識者の間に眞實な國民的自覺が起つて來た。この自覺に基づいて、我が國體、國史、國文などの研究に向つて志を立てた最も著しい學者が荷田春滿であつて、引續いて賀茂眞淵、本居宣長、平田篤胤等が、それ



荷田春滿

ぞれ師弟關係でその學風の發展に力を盡したのである。かういふ學風が即ち國學であつて、數多い國學者の中でも特にこの人たちが國學の四大人として尊重されてゐる。

春滿は山城國伏見の稻荷神社の祠官羽倉氏の一族で、名はまた東磨とも書いた。博學敦厚の人で、律令の學に精しく、江戸幕府の信任を受け、晩年、倭學校の創建を計畫したが果さなかつた。萬葉集童蒙抄、伊勢物語童子問など多くの著

(一)今、京都市伏見區深草藪ノ内町。官幣大社。

述がある。

眞淵は遠江國の人で、岡部氏を稱し、縣居と號した。春滿に就いて國學を修め、江戸に出て萬葉振の歌風を高調し、由安宗武の寵遇を



賀茂眞淵

受けた。門下からは村田春海、橘千蔭などの人才が輩出して、古學は爲に大いに起つた。萬葉考、祝詞考、冠辭考、國意考などの新研究が少くない。

宣長は縣居門下に出た出藍の才で、蓋し本邦稀に見る學者である。伊勢國松阪に生れ、鈴屋と號した。少年の頃父を喪ひ、母の苦心によつて小兒科の醫師となり、また契沖や眞淵等の著書に動かされて、我が古典の研究にも心を潜めたが、壯年の頃眞淵を松阪の旅宿に訪うて、愈皇國學への志を固くした。宣長は博覽強記で、獨創的識見と

(一)第八代將軍吉宗の第二子。吉松平定信の父。明和八年(一七九〇年)四月三十一日(二)歿。



〔後〕鈴屋と號した。文政十一年(一八二八)歿。年六十八。

〔伊勢〕松阪の稻掛家に生れて、宣長の養子となつた。紀州退任して、弟に授けられた。天保四年(一八三三)歿。年七十八。

〔第百十九代〕光格天皇の御代(一四五五年)。

〔同上〕(一四六一年)。

組織的學才とに富み、古事記傳の大著をはじめ、玉勝間、直日靈、玉くしげ、玉の小櫛、玉鉾百首、歷朝詔詞解等の著書が多く、これ等は何れも後世の學界に裨益を與へてゐる。その子春庭の詞八衢は文法に關する名著であつて、養子大平もまた忠實な家學の繼承者である。鈴屋の門人は天下に普く、その主張した日本精神の覺醒は、寛政頃の國民思想に大きな反省を促したが、その後を繼いで、幕末の思想界に強い衝動を與へ、勤皇の精神に深い刺戟を加へて、國學をして明治維新の一勢力たらしめた功勞者の一人は篤胤である。篤胤は出羽國秋田の人で、氣吹屋と號した。寛政七年の春、二十歳の時江戸に出て、苦學力行の生活を營み、享和元年即ち宣長の歿した年、その著書に啓發されて、いはゆる歿後の門人となり、常に幾多の艱難と闘ひつゝ、善く先人未踏の研究を試み、また斷えず反對者の惡罵を排撃しつゝ、遂に等身の著述を公にした。その意志の鞏固

造詣 〔若狭〕小濱の藩士。宣長歿後、門人長者の著書に感服して、獨り學問に専らした。享和元年(一八三〇)歿。年七十四。

〔歌人〕伊勢の人。宣長の對して、學問の詳説を立て、得るに對して、嘉永二年(一八二〇)歿。年五十九。

〔農政家、醫師〕出羽の諸藩に遊學した。嘉永八年(一八三三)歿。年八十。

〔勳皇家〕本姓は穂積。淡路の藩士。宣長が久松義典の才學を賞した。三五年(一八二二)歿。年五十二。

〔手〕三五年(一八二二)歿。年五十二。



香川景樹

と理性の透徹とは、正に彼をして立志傳中の人物たらしめたのであるが、その雄大な學風と熱烈な主張とに共鳴した多くの門人は、おのづからその精神を、幕末から維新へかけて日本の社會に活躍させたのである。篤胤の著書は古史傳、玉襟靈能眞柱、古史徵、古道大意、俗神道大意、印度藏志、出定笑語、西籍慨論など數十部に上り、支那の古書、佛敎の經典などに關しても、その深い造詣を示してゐるものが多い。國學界にはなほ多くの天才が輩出してゐる。國文に妙を得た上田秋成、歴史に精通した伴信友、和歌に巧な香川景樹、斬新な研究に長じた橘守部、國學を政治、經濟と結合した佐藤信淵、理性の精緻を恣にした鈴木重胤、國學に新生面を開拓した大國隆正の如き、何れも豊富な原因に興起した國學が、多方面の



石見國津和野初め  
の藩士國々  
の姓は山野と  
天柱は國人學  
通じた。鳳凰に  
政治復古の意  
を抱いた。明  
治四年二月五  
年三月十一日

發展をなし得る可能性を有する事を事實に示したものである。江戸時代の學界と教育界とは儒教の勢力下にあつた。佛教の信仰も幕府の保護と長い間の習慣によつて少からぬ勢力があつた。神道に關する學説も、元祿享保の頃には可なり多く世に行はれた。かゝる間にあつて、國學が盛に發達し、當代の後半期に於ける最も重要な思想、學説となつて、終に明治維新の有力な原動力となつた理由は、那邊に存するのであらうか。

江戸時代には鎖國政策が行はれ、國民は一般に太平無事を楽しんで居つた。隨つて學問、教育はすべて保守に甘んじ、國民思想は全く冬眠を貪つて居つたやうに考へられてゐる。しかしながら、日本精神は決して永く安逸を好むものではない。日本民族は常に儉安姑息に満足してをるものではない。江戸時代にも理性は斷えず生きた知識を求め、感情は成るべく朗かな暢達を望み、意志は底力の

暢達

自由  
の  
的  
價  
値

ある信念を欲して居つたのである。國學は自由な研究と清新な學風とによつてその理性に適應し、純樸快活な思想と平易自然な教育とによつてその感情に満足とを與へ、國體觀念と敬神思想とを強調して、その意志に緊張味と靈的氣分とを加へた。かういふ人心の傾向に乘じ、時代の要求に合した所に、國學の發展を見る事が出来たので、其所に國學の特性と歴史的價值とが存するのである。

國民の知情意に満足とを與へ、時代の趨勢に乗じて進展して來た國學には、種々な特色を具へた學者が現れた。かくて日本人は、國學によつても文化を消化し創造する能力を鍛鍊し、國體を尊重し自國を愛護する信念を樹立した結果として、明治維新を大成すると共に、明治以後の新文明を開拓し得たのである。國學は舊時代に於ける鎖國日本の内容の充實に貢獻したのみでなく、またよく新時代の國際日本に對しても、重要な自主的立場を据附けたのである。



九 國學と日本精神 その二

明治維新は我が國の政治に取つても、また國民生活に取つても、實に目ざましい變動であり、進展であつて、日本文明の發達上、最も顯著な劃期的事件であると共に、日本民族の精神的活動がいかに豊富な價値を有するかを、雄辯に物語る事實である。

明治維新は嚴肅雄大な王政復古であると同時に、快活大膽な開國進取である。この復古的事業と進取的態度とは、固より識者の賢明と一般の猛進とも關係してをるが、その根柢には、まさしく日本精神の自覺が存し、或はその元氣が動いて居つたのであると見なければならぬ。實に我が日本精神の興隆が舊幕時代の日本を解放し、その活動が明治時代の國運を展開した最も大きな力である事は、何人も否定する事が出来ないのである。

近世に於ける我が國史の發展、即ち我が國民の活動を左右した最も本質的な力は、日本精神その物であるが、この日本精神を覺醒せしめ、培養し、そして活躍せしめたのには、國學者の力が與つて最も力あると言はなければならぬ。

明治三年五月五日、芝の増上寺の門前にあつた紀州邸に於て、四大人の靈祭が執行された。<sup>(一)</sup>四親王家からも、各大臣からも、和歌や幣物が贈られ、外務卿澤宣嘉は自ら玉串を捧げ、神祇官の主要な官員が殆ど總出で祭典に奉仕した。その盛大な靈祭は、多くの參列者をして、坐ろに明治維新に光を添へた四大人たちの學問的、精神的の功績を追慕せしめたのである。

ふみ分けよ倭にはあらぬ唐鳥の

あとをみるのみ人の道かは

これは春滿が書といふ題で詠んだ歌である。日本人は先づ日本

(一) 東京市芝公園内。淨土宗。徳川氏の菩提所。  
(二) 伏見宮、有栖川宮、桂宮、閑院宮の御四家。  
(三) 元三位主水正維新後、外務卿となり、次いで特命全權公使となつたが、明治六年(一八七三年)三月病歿した。



の文化に親しみ、日本の精神を自覺しなければならぬ。漢籍、佛典にのみ心思を勞した當時にあつて、春滿が蹶然起つて皇國の學を復古し、古道を發揚しようとした意氣と識見とは、誠に深く歎賞しなげればならないのである。

飛驒たくみほめて造れる眞木柱

たてし心はうごかざらまし

實曆五年の秋眞淵はその家を新築したが、古典を愛し、民族精神を重んずる人たちの集ひ壽いだ時に、徐に詠んで示した一首が即ちこの歌である。學問を修め、國家に奉仕しようとする者は常にその志を堅くし、その信念を深くしなければならぬ。眞に眞淵が萬葉集の歌風を愛し、古語の註釋に努力したその理想には、高いものがあつた。その理想を繼承し發揮した者が學界の偉人宣長である。宣長の詠じた

〔第一百十六代桃  
國天皇の御代  
二四一五年〕

しきしまのやまと心を人間は

朝日ににほふ山ざくらばな

といふ一首は、恐らくは最も人口に膾炙された名歌の一つであらう。日本精神の昔ながらの姿としての日本心を最も善く考察し、最も深く愛重してゐた宣長は、その特色を具體化した櫻花を好んで居つた。その山櫻に朝日が映じた姿は、莊麗端嚴な秀峯富士山と共に、まさしく日本心の表現である。宣長はその日本心を我が古典に見出し、これを以て我が國體の根柢に培ひ、我が文化の精髓を形づけるものと信じたのである。

我が日本心の第一の特色は神々しさの氣分である。即ち上品な尊い一種の神聖感である。第二の特色は懐かしさである。何となく親しみのある温かい心持である。第三の特色は清々しさ、即ちさつぱりとした恬淡な性情である。この三つの特色は、神社や國旗に於



神州の正氣

て最もよく現れてゐるが、また朝日の射した麗しい山櫻の花の趣にも、これを眺め見る事が出来る。この點から觀て、宣長のかの三十一文字は、最も簡潔に、且適切に、日本心の特徴を譬へ得た、千古の絶唱であるとも言へよう。この日本心が力強く生動して日本魂となり、神州の正氣となるのである。

日本心の神々しさの念と清々しさの氣分とが結合して、其所に雄々しさ、即ち強い勇氣が出て来る。またその神々しさが懐かしさに作用する時に、みやびといふ優雅な情操が生ずる。更に清々しい氣持に懐かしさの情が結び附くと、大らかさといふ廣いゆつたりとした心持になる。かういふ種々の貴重な性情の源泉が日本心であり、その表現が日本文化の特色である。

四大人のうちで、眞淵の性格は大らかであり、宣長はみやびな性情に富み、春滿は寧ろ雄々しい氣象に近かつたが、篤胤は殊に雄々

快感を滿喫する

しい性格の持主であつた。かゝる各人各様の特色は主としてその個性に基づくのであるが、またその人たちの環境としての地理と時代との關係にも由るのである。とにかく日本心を發揮した四大人が、それ／＼かやうな特色を有して居つた事は、誠に興味深い現象であつて、其所にまた國學の多様性があるとも言へるのである。艱難と努力とに生活苦を嘗めた篤胤は、またその活動によつて學者としての快感を滿喫した。次の一首は彼の覺悟と業績とを語るものである。

雲となりあるは雨ともふりしきて

かみよの道に身をやつくさん

この決心は、全くその爲せば成り爲さねば成らず成る業を成らずと棄つる人のはかなさといふ負けじ魂から來てゐるのである。篤胤は理性に富み、感情を重んじたが、何れかと言へば意志の人であ

負けじ魂



る。その磐石のやうな意志と絶倫な精力とが、その比較考證に長じた古學と、活氣横溢した古道とをして、幕末の學界に雄飛せしめたのである。かくて篤胤の學風は、國學をしておのづから偏狹排外の角度を鋭からしめたけれども、また時代に適應して國學を活躍させた功績は、これを多としなければならぬ。

國學はその勃興した原因に於て種々の事情が結合したやうに、その發達した結果にあつても種々の意義が見出される。換言すれば、國學は我が近世の思想史上に於て幾多の役目を果してゐる。國體觀念を明徴にして、我が國民道德の歸嚮するところを明確にした事がその一である。人間生活に取つて最も貴い眞心を力説し、その純眞な明るい活動を以て人格の基礎とした事がその二である。我が國民性の本質を究明して、その復活に努力し、其所に日本文化の特徴を求め、國民精神の根柢を置いた事がその三である。古典の

歸嚮

價値を闡明し、國語の淵源を探究して、我が國特殊の古典教育を開拓した事がその四である。我が上代史の事實と家庭に於ける實情とに願て、母性の尊重を説き、女子に學問的趣味を與へた事がその五である。神代の信仰を重んじ、建國の神話に憧れたから、日本民族特有な敬神崇祖の觀念を強調し、廣く濫かい純な宗教的情操を喚起した事がその六である。そしてこれ等の事實は、國學が我が思想史若しくは文化史に寄與した大きな功績で、國學の性質を研究する者の特に注意すべき點である。かくて國學が種々な意義を以て、明治維新に及した刺戟と效果とは、再び此所に繰返して述べる必要もあるまい。

日本民族の將來は、その國際的位置と文化的使命との關係から、益多事であり、多難であり、しかも多望であると言はなければならぬ。この多端な未來に直面して、勇往邁進するには、須らくその國



民的信念を固くし、傳統的文化を理解して、先づその自主自重の精神を築くべきである。即ち日本精神は常に日本人活動の中心でなければならぬ。我が國今後のかゝる事情から熟慮して、我等は愈々日本心の特色を涵養發揮し、以て皇國の精華を輝かし、人類の幸福を進める覺悟を持つてゐる必要がある。この必要に對しても、國學とその發達の過程とは少からぬ暗示を與へてゐると思ふのである。

一〇 澁澤榮一の生涯

佐治祐吉

澁澤榮一は理智の人であつた。

嘉永六年、年僅かに十四の時である、姉の病氣を氣にした彼の母は、修驗者を呼入れて祟を祓はうとした。彼は祟なるものの存在を認めなかつた。さうしてまだ頑是ない少年の彼は、易々と修驗者を

(一)元會社員。明治二十七年(二五四年)若松市(福島縣)に生れた。  
(二)第百二十一代孝明天皇の御代(二五一年)

頑是ない

(一)澁澤美雅。晩香と號した。

論破して、退散せしめたのである。

彼の家は名主格の農家であつた。父は早くから彼に漢籍を教へ、稍長じては隣村の師に就かした。この漢學による教養は愈々彼の理智と信念とを磨き、若くして既に、正理のある所千萬人と雖も我往かんの氣概を抱かしめるやうになつた。

武藏の一隅にある彼の郷里は安部攝津守の領地で、代官がこれを治めてゐた。當時の習慣で、代官は種々の名目を以て屢々領内の素封家に御用金を課してゐた。安政三年彼が十七の時である、一日、彼は父の名代として代官屋敷へ行つたところが、代官から五百兩の御用金を命ぜられた。けれども彼は單なる父の名代である、即答は致しかねる」と答へたので、彼をば若年と侮つた代官は、あらゆる罵詈を加へて、威服しようとした。しかし彼の心中には、既に毅然として正理の念が存してゐた。彼は抑、御用金なるもののあらう道理の

(二)埼玉縣大里郡血洗島(今は同郡八基村に編入された)  
(三)武藏國(埼玉縣)岡部の領主。祿高は二萬二百石。  
(四)孝明天皇の御代、徳川家定の治世(二五一年)

罵詈名代



理不盡

憤懣

關心

ない事を認めて、敢へて承服せず、歸來その非理を父に訴へ、また愚  
かしき代官なる者が理不盡に良民を搾取する制度を憤つた。若い  
彼の心に植附けられたこの憤は、彼の一生を貫いて働きかけた。封  
建世襲制度に對する憤懣、後年に於ける彼の弱者に對する同情、人  
格の尊重、世運の進展に對する關心、これ皆彼の賢しい理智の表れ  
には相違ないが、この少年時代の代官事件が、はつきりと彼の心を  
覺醒させた結果と言つてもよからうと思ふ。

けれども、彼が單なる理智の人に止つてゐたならば、彼もまた一  
村の長者、一郷の才子たるに過ぎなかつたかも知れない。彼はまた  
確かに類ひ稀なる才の人であつた。

風雲急を加へ

坐視する

幕末の風雲は、黒船の來航によつて愈、急を加へた。平和な彼の村  
にも、國を憂へる志士の來往が頻りとなつた。十八歳の頃から、彼は  
これ等の儒者や劍客に交り、身農民と雖も坐視すべき時世でない

(一)孝明天皇の御  
代の治世。(二五  
二三年)

因循

事を覺つた。其所で、父に請うて許を得、遊學の目的を以て、農閑期に  
江戸へ出た。彼の學んだところは、いはゆる水戸學の大義名分であ  
つた。さうして彼はこれを實現しようとする理想を抱いたのであ  
る。然り、彼は理想の人であつ



若き日の澁澤榮一

た。

(一) 文久三年彼が二十四歳の  
時、彼は幕府が攘夷の敕命を  
奉じながら、因循遂に爲すな  
きを知るや、今はその士たる

と農たるとを論ずべき秋にあらずとして、敢然攘夷の義旗を擧ぐ  
べく、僅かに百人にも足らぬ同志と共に、その密謀を進めたのであ  
る。時に從兄にして同志であり、密に京師に上つて形勢を窺つてゐ  
た者があつたが、この報を得て郷に歸り、その計畫の無謀なのを説



趨勢を洞観する

(一)水戸齊昭の第七子。入つて第十五代將軍となつたが、後大政を奉還して退いた。公爵。年七十二。七。年。公。爵。年。七。十。二。

(二)フランス皇帝ナポレオン一世の第三子。西紀一八〇八年(一八一三年)。

慧敏

いた。終夜論争した末、彼は遂にその非を悟り、従兄の言に随つて初志を譲した。かくて彼は、當時の偵吏である八州取締の檢察を避けると共に、天下の趨勢を洞観すべく、京都へ上つた。然るに皮肉な運命は、この討幕黨の青年をして、一時節を屈して、幕府の親藩で禁裏守衛總督たる一橋慶喜の家來となるの止むなきに至らしめた。幸に彼は賢君慶喜の知るところとなり、慶喜の出で、將軍職を襲ぐや、慶應三年その親弟徳川昭武に隨行して、歐洲の風物に接する事となつた。かくてナポレオン三世時代の佛國に滞在し、その間また英、獨、白、伊、西の各國を巡覽した。滯歐の期間は短かつた。けれども彼の慧敏な眼に映じた歐洲の文物は、後日明治年間に於ける我が國の發展に、いかばかりの寄與を爲したであらうか。

彼が若くして歐洲の文明に接する事の出來たのは、彼に取つて非常な幸福であつた。が、それにも増して、日本の社會に取つてより多く幸福であつたと言はねばならぬ。

歸來、彼は一躍明治政府の高官に拔擢され、新日本建設の爲に驚くべき才幹を發揮し、明治四年の廢藩置縣に際しては、大藏大輔井上馨の下に權大丞として、全國各藩の藩札、藩債や、船舶、鐵砲等の始末から、複雑極りなき幾多の條規の立案に鞅掌し、時には三日三晩に互つて、不眠不休で働いた事もあつた。

しかしながら、一朝財政上の意見の廟堂に容れられざるを知るや、榮官を抛つて野に下り、その宿望たる實業開發の爲に、全幅の努力を捧げる事となつた。これは、國家の富強は實業の發達によらなければならぬとの卓見に基づくものであつて、夙に彼が佛國留學中に於て痛感したところである。

(一)政治家。舊款藩士。侯爵。大正四年歿。年八十一。

鞅掌する

廟堂

野に下る  
全幅の努力



草創

日本に於ける銀行、製紙、紡績、人造肥料製造、ビール醸造等、一として彼が草創の苦心の拂はれぬものはない。鐵道、海運、鑛業、製糖、ガス、電力、セメント製造、その他實業のあらゆる方面に互つて彼の努力は注がれた。近世に於ける我が國の産業は、専ら彼によつて開發されたと言つても、過言ではない。

彼は常に、我が國運の進展に必要なるが故に新事業に著手した。しかしながら、新事業には概ね致命的の打撃が伴なつた。銀行には金銀比價の變動による紙幣の取附が生じ、紡績事業には原棉輸入の困難が生じ、人造肥料にはその使用の知識を普及せしめる困難があり、ビール醸造には原麥問題が生じ、一時は殆ど全事業が蹉跌し了るかと思はれる程であつた。當時に於ける彼の努力は、唯赤心報國の志士のそれであつた。さうして彼は見事にその難關を突破して行つた。

取附

蹉跌する

荆棘を打開する

かくて多くの事業が成功の域に達した時には、彼はもはやその事業に止る事を欲しなかつた。彼は常に荆棘を打開して進む受難者であり、然るべき後繼者を見出すや、その絶倫な精力は更に未開の新しい事業に向つて注がれるのであつた。實に至誠の人、胸中唯奉公の理想あるのみであつた。

喜壽に達した時、彼は全く實業界から引退し、これより社會公共事業に向つて専らその力を盡すやうになつた。昭和六年薨去當時に於て彼の關係してゐた公共團體の數は二百を超えてゐた。しかも單なる名義上の關係に止るものはなく、何れもその事業を知り、その事業の爲に獻身的努力を捧げてゐたものばかりであつた。現代の社會事業家にして彼の門を敲かぬ者はなく、しかも己を空しうしての彼の助力を得なかつた者はなかつたであらう。道義肝に徹し、温恭人を容るとはげにも評し得たりと言ふべきである。その

喜壽

(一)當時の東京商  
野善作の弔詞  
中の句。



(一)明治七年(二五三四年)以來その歿前まで院長であつた。  
(二)大正五年設立。各方面の代表者。委員として。日米國交の親善を計る事を目的とする。  
彷徨する

皮相の見

(三)西紀一九二一年

諧謔

最も主なるものとしては、<sup>(一)</sup>東京市養育院及び<sup>(二)</sup>日米關係委員會を擧げる事が出来る。  
彼の九十二年の生涯は、誠に恵まれた一生であつた。時勢は彼の如き先覺者を要求した。彼の數奇な運命は、彼をして幾度か生死の巷を彷徨せしめつゝ、面白いやうに轉回して行つた。しかしながら、單に彼が長命の故に、また幸運の故に、かくの如き大をなすに至つたと觀るならば、それは皮相の見に過ぎぬであらう。彼が一事一業に著手するや、渾身の熱誠を傾注してこれに當り、斃れて後已むのであつた。<sup>(三)</sup>大正十年かの排日問題對策の爲に、民間の代表として、彼が八十二歳の老軀を提げて米國に渡航した際に、サンフランシスコ商業會議所會頭ウラス・アレクサンダー氏が、彼に對して遠來の勞を謝するや、彼は言下に「嬌然」として、問題が生ずればいつでも参ります。この次には棺桶を背負つて参ります」と答へ、輕妙な諧謔の裡

至誠を披瀝する

(一)公爵徳川家達の中詞中の句

に至誠を披瀝して、一座を感動せしめたのであつた。  
然り、彼には一つの大きな理想があつた。彼をしてかゝる奉公の一生を送らしめ、遂に世人をして「國家の元勳、一世の慈父」と仰がしめるに至つたのも、即ちこの熾烈な理想の力と言はねばならぬ。



晩年の澁澤榮一

彼の諸の活動は、すべてこれ彼の高い理想の泉より流れ出るものであつた。是れなりと信じて事に當るや、心中一點の遲疑するところもなければ、微塵の欲心もない。彼は己の生命よりも己の理想を愛した。眞の志士、眞の國士、と彼の魂に呼懸けたなら、地下に瞑せる彼は莞爾としてほゝゑむであらう。

彼の烈々たる理想に燃える意氣は、九十餘年の生涯を貫いて、毫も衰退を見せなかつた。彼の場合にもまた「本立つて道生ず」と言ふ

語學而第一



〔舊約聖書箴言  
第二十九章第  
十八節〕

べきであらう。

理智の人、大才の人、而して實に理想の人、澁澤榮一を敍するに方  
つて、余は千古の名言を想ひ出すのである。——曰く「<sup>(1)</sup>夢なき民は氓  
<sup>(2)</sup>」。

一一 わが教へ子に戒めおくやう 本居 宣長

新たなる説を出すこと

近き世、學問の道ひらけて、おほかた萬づのとりまかなひさとく  
賢くなりぬるから、とりくゝに新たなる説を出す人多く、その説よ  
ろしければ世にもはやさるゝによりて、なべての學者いまだよ  
くもとゝのはぬほどより、われおとらじと世に異なるめづらしき  
説を出して、人の耳を驚かすこと今の世の習なり。その中にはずる  
ぶんによろしきことも稀には出て來めれど、おほかたいまだしき

うけばり

學者の心はやりていひ出づることは、たゞ人にまさらん勝たんの  
心にて、かろくゝしくまへしりへをもよくも考へあはせず、思ひよ  
れるまゝにうち出づる故に、多くはいみじきひがごとのみなり。  
すべて新たなる説を出すはいと大事なり。幾たびもかへさひ思  
ひて、よくたしかなるよりどころをとらへ、いづくまでもゆきとほ  
りて、たがふところなく動くまじきにあらずば、たやすくは出すま  
じきわざなり。その時にはうけばりてよしと思ふも、ほどへて後に  
今一たびよく思へば、なほわろかりけりとわれながらだに思ひな  
らるゝ事の多きぞかし。

師の説になづまざること

おのれいにしへぶみを解くに、師の説とたがへること多く、師の  
説のわろき事あるをばわきまへ言ふことも多かるを、いとあるま  
じき事と思ふ人多かんめれど、これすなはちわが師の心にて、常に

一一 わが教へ子に戒めおくやう

六九



教へられしは、後によりき考の出で來らんには、必ずしも師の説にたがふとてな憚りそ。となん教へられし。こはいと尊き教にて、わが師の世にすぐれ給へる一つなり。おほかた古へを考ふること、さらに一人二人の力もてことくくあきらめ盡すべくもあらず、またよき人の説ならんからに、多くの中には誤もなどかなからん。必ずわろきこともまじらではえあらず。そのおのが心には、今は古へのころことくく明らかなり、これをおきてはあるべくもあらずと思ひ定めたる事も、思の外に、また人の異なるよき考も出で來るわざなり。あまたの手を経るまにくく、さきくくのうへを、なほよく考へきはむるからに、つきくにくはしくなりもて行くわざなれば、師の説なりとて、必ずなづみ守るべきにもあらず。よき、あしきを言はず、ひたぶるに古きを守るは、學問の道には言ふかひなきわざなり。

またおのが師などのわろきことを言ひあらはすは、いともかしこくはあれど、それも言はざれば、世の學者その説にまどひて、長くよきを知ることなし。師の説なりとして、わろきを知りながら言はず、つゝみかくして、よざまにつくろひをらんは、たゞ師をのみ尊みて、道をば思はざるなり。宣長は道を尊み古へを思ひて、ひたぶるに道の明らかならん事を思ひ、古へのことの明らかならん事をむねと思ふが故に、わたくしに師を尊むことわりの缺けんことをば、えしもかへりみざることあるを、なほわろしとそしらん人は、そしりてよ。そはせんかたなし。われは人にそしられじ、よき人にならんとて、道をまげ古への意をまげて、さてあるわざはえせずなん。これすなはちわが師の心なれば、かへりては師を尊むにもあるべくや。そはいかにもあれ。

わが教へ子に戒めおくやう



かにもかくに

われに従ひて物まなばんともがらも、わが後にまたよき考の出で來らんには、必ずわが説にななづみそ。わがあしき故を言ひて、よき考をひろめよ。すべておのが人を教ふるは、道を明らかにせんとなれば、かにもかくにも道を明らかにせんぞ、われを用ふるにはありける。道を思はでいたづらにわれを尊まんは、わが心にはあらざるぞかし。

一二 みくにまなび

平田篤胤

學問には色々ある。その中に何の學問がいつち大きいぞと言ふに、ちと自分勝手のやうなれども、皇國即ち我が國の學問程大きいものはない。御座る。なぜと言ふに、先づ近く儒學と佛學との上で申さば、儒者は最初四書五經とか、十三經とかいふ類の書物を讀む事を覺え、また左國史漢と言つて、左傳といふもの、國語といふもの、

(一)江戸時代の國學者  
出羽の羽田篤胤  
天保五年(一八三四年)八月

史記といふもの、漢書といふものなどをあらく讀んで、さて漢文を綴る方を覺えたり、そのふだんの口ずさみに詩を作る事でも覺えると、もう儒者と言つて通られるが、何のこれしきの書物を讀んで、これしきの事を覺ゆるに、さして難い事は、ありやいたさんで御座る。大方世間の儒者は、皆このくらゐなもので御座る。

百千度來ま  
さむ君に春  
雨のさそひ  
顔なるわか  
れ道やなそ  
篤胤

平田篤胤筆蹟

さてその儒者に比べては、出家の方がよつほど廣い。なぜと言ふに、己が是非讀まねばならぬときめた俗に言ふ經文が五千餘卷、馬につけたならば、七八駄あらう。それをみんな讀まず、十分の一を讀んだところが、ざつと儒者がおもと讀まねばならぬ書物の一倍もある。御座る。そのみならず、儒者は佛書を讀まんでも事が缺け

鈴鹿のかき  
の京にかへ  
り給ふころ  
いはく雨ふ  
りけるに馬  
のはなむけ  
して  
百千度來ま  
さむ君に春  
雨のさそひ  
顔なるわか  
れ道やなそ  
篤胤

おもと



ぬによつて、とんと讀まず。たまさか佛書を讀む儒者もあれど、そりや百人に一人もない。僧徒はそれと事かはり、儒者のおもと見る書物をば、子供の時から文字を知る爲に讀んで置く。また詩も漢文も儒者と同じやうに作りもする。そこで僧徒の學問は儒者よりは廣いで御座る。

さて皇國の學問がいつち廣いと言ふ故は、右申す通り、儒學、佛學をはじめ種々様々の學問があつて、その道のこゝろと事とが、悉く皇國の學び事に混雜して、譬へば、彼の八紘九野の水、天漢の流これに注がずといふ事なしといふ如くて御座る。その通り入混つてある故に、人の心もそれに従つて移り、何れを是とも、何れを非とも分ちかねて、言はゞまごついてゐる事が多くある。それ故に、その混雜をつぶさに分けねば、眞の道の有難き所も顯れず、その混雜をより分けて、眞の道の害となる事をいひ顯さうとするに就いては、よく

八紘九野  
天漢

(一)宋の蘇軾の弟  
轍、政和二年  
十二月十四日  
歿、年七

先方の事をも知らねばならず。かの唐人蘇子由といふ者の、善く人と言ふ者、其の人の言に因つてこれが言を爲せば、則ち天下の辯者服す。云々と申したる如く、此方の事ばかり言つたのではないか。例へば、僧徒を諭すには佛書で言ふと、ぎうの音も出ず、儒者を諭すには儒書で論ずれば、猫に追はれた鼠のやうに畏まる。されば皇國の純らと正しい道を得ようとするには、それに心得なくてはかなはぬ事、御座る。殊にもろくの學問の道、たとひ外國の事にしろ、皇國人が學ぶからは、そのよき事を選んで、皇國の用にせうとの事で御座る。さすれば、實は漢土は勿論、天竺、阿蘭陀の學問をも、すべて皇國まなびと言つても、違はぬ程の事で、即ちこれが皇國人にして外國の事を學ぶ者の心得で御座る。

—古道大意—



(一) 哲學者、文學博士、  
大學教授、  
東京明治大學  
三年(一九二五)に  
生れた。

白雲

逆境の恩寵

(一) 加藤 玄智

新聞を賣りながら勉強する、牛乳を配達しながら學校に通ふ。いかにもつらい。朝も早く起きなければならぬ。夜も寝るのが遅くなる。雨の日でも雪の夜でも休む事は出来ない。そして勉強といへば、纒かにその前後僅少な時間を利用してなし得るに過ぎない。どうも苦しい。これが華族の若様に生れたなら、富豪の子弟であつたならばと、時々愚痴も出る。女學生にしてもさうである。家が零落して父は既に逝き、母は病身、女中も使はず臺所の水仕事は言ふに及ばず、幼い弟妹の世話までして學校に出なければならぬ。これが華族のお姫様であつたならばと、時に我と我が身を顧て、不幸の身を歎つ涙も出よう。さあこゝだ。考へ直さなければならぬところはこのさうだ。さういふ逆境が、却つてほんたうの人物を作り上げてくれるものである。いはゆる「艱難汝を玉にす」で、

うぶな者  
世の惡風に染  
まないう者  
沈淪する  
落ちぶれる。

順境にあつてしたい放題の出来る者は、遂に身を誤り易い。朝寝坊はする。毎日學校も遅刻をする。金も多少は自由になるところから金使ひも荒くなる。やれ活動寫眞だ、やれ芝居だと勝手に遊び歩く。世間にはさういふうぶな者を引掛けようとして、網を張つて待つてをる惡魔が澤山ある。終に墮落に墮落を重ねて、救ひ難い人生の深淵に沈淪し、有爲の一生を棒に振つてしまふ者が少くない。かういふのは、その人個人の不幸と言ふばかりでなく、國家の立場からも大きな損失である。勿論、順境にある者が皆々さうといふ譯ではないが、動もすれば、さういふ魔の誘惑に罹り易い。これに反して逆境にある者は、生活に餘裕が少い。腕一本、腰一本でし上げなければ、獨り自分の一身が立ちゆかないばかりでなく、父母兄弟をも窮境に陥れる虞がある。どうしてもそんな優長な事をしてはをられない。自分だけでもどしどし勉強して、早くし上げてしまはなければならぬ。かういふ氣分だから、逆



盤根錯節ハタ  
後漢書に見え  
る言葉。

古人  
支那南北朝時  
代の宋人范曄。  
後漢書の撰者。

儋石の儲  
すこしのたく  
はへ。

蘊奥  
學問技藝など  
のおくそこ。

嶄然  
一段高く抜き  
出たさま。

頭角を見す  
才學が群にす  
ぐれあらはれ  
出るに言ふ。

境にある人は、學生にしても眞面目である。氣分に眞劍味を帯びてをる。石に嚙りついても成功しなければならぬといふ生存上の必要が、ひし／＼と身に迫つて來てをる。この眞面目。この眞劍味。これが實に人を成功に導く偉大な原動力である。盤根錯節に



平やと言つた古人の言實に我を欺かぬのである。我が國學の大家平田篤胤翁が、家に儋石の儲もなく、僅かに胤醫を業として生計を支持し、傍ら國學の蘊奥を究め、以て嶄然斯界に頭

角を見したのも、一にその逆境の賜である。翁は古道の闡明にこれ日も足らずして、僅かな時間でも惜しんで勉強された爲、花鳥風月の目を喜ばし耳を樂しましめる物をも、十分賞玩する餘裕がなかつた。これ翁に花鳥風月を詠じた歌の見るべきものが少

黽勉

つとめはげむこと。  
大器を晩成する

おそくまでかかつて大人才を作り上げる。秀忠の第四子。會津松平家の祖。寛文十二年(一七二二)歿。年六十

得知らぬ  
知ることの出  
來ない。

心交  
心と心との交  
り。

拮据  
身體を勞し働  
くこと。

先王の道  
昔の聖王のと  
なへた道。

い所以であらう。或時翁はこの感慨を述べて

月花をわれもあはれと見てはあれど

あはれと歌ふひまなかりけり

と言つてをる。以て翁が貧賤の中で黽勉學に勤しまれ、以てその大器を晩成された苦心が想見されるのである。山崎闇齋が曾て會津侯保科正之の間に答へて、自分には人の得知らぬ三つの樂しみのある事を告げ、第一は、禽獸に生れずして人間と生れた事、第二は、幸に亂世兵馬の間に生れずして生を泰平の御世に享け、靜かに古書を繙いて古聖前賢とその心交を縦にする事を得る事、第三は、王侯の家に生れて婦人の手に成長し、無意義な一生を過す事なく、幸にも貧困に生れて拮据勉勵、辛苦を嘗めて學問をし、先王の道を學ぶ事を得た事、この三樂中、最後の第一樂こそ實に貧賤の中に長じた者の天與の特權であると喝破し、以て會津侯



諷諫  
遠まはしにい  
さめること。  
それとなくい  
さめること。  
這般  
この。

天公配劑の妙  
天帝(造化の  
神)の配りあ  
はせのたくみ  
なこと。  
(一)作者不詳。塞  
翁の馬とうま  
くとかけて  
ある。

(二)新約聖書  
書第五章

を諷諫したと言ふのも、また這般の消息をよく傳へてをる。獅子は己の生んだばかりの子を、千尋の谷底に蹴落して、艱難に處する訓練をこれに與へるとの事である。かくして百獸の王となる資格も自然養はれるのである。順境の生む悲喜劇、逆境の與へる天恵、達觀し來れば、眞に天公配劑の妙に驚かざるを得ない。

世のなかは何につけても塞翁の

うまくは行かぬものところ知れ

しかもこのうまく行かぬところに妙味があり、大宇宙の深い教訓が含まれてをり、未來の偉人を生出す眞の訓練が存してをるのである。使徒ポーロはこの點に關する自己の體驗を左の如く述べてをる。眞に味はふべき言葉である。

艱難にも喜をなせり。蓋し艱難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生じ、希望は恥を來らせざるを知る。支那の賢哲孟子はまた左の如く説いてをる。

(一)孟子告子章句  
下。

拂亂す  
逆らひ亂す。  
曾益す  
だん／＼ふや  
す。

(二)作者不詳。

天の將に大任をこの人に降さんとするや、必ず先づその心志を苦しめ、その筋骨を勞し、その體膚を餓し、その身を空乏にし、行そのなすところに拂亂す。心を動かし性を忍んで、その能くせざるところを曾益する所以なり。

と、古歌に曰く、

うき事のなほこの上につもれかし

かぎりある身のちからためさん

一三 御堂關白

花山院の御時に、五月下つ闇に五月雨も過ぎて、いとおどろおどろしくかき亂れ雨のふる夜、帝さう／＼しくや思し召しけん、殿上に出でさせおはしまして、遊びおはしましけるに、人々御物語申しなどし給ひて、昔恐しかりける事どもなどに申しなり給へるに、今

(三)第六十五代花  
山天皇。天皇  
は御讓位後、花  
山院に入御あ  
らせられた。  
さう／＼し



むづかしげ  
けしき覺ゆ

(一)藤原道長。

さる所おはし  
ます帝

(二)藤原道隆。道  
長の長兄。

(三)藤原道兼。道  
長の仲兄。

びんなき事

にがむく

宵こそいとむづかしげなる夜なめれ。かく人がちなるにだに、けし  
き覺ゆ。ましてもの離れたる所などいかならん。さあらん所に一人  
いなんや」と仰せられけるに、「えまからじ」とのみ申し給ひけるを、入  
道殿は「いづくなりともまかりなん」と申し給ひければ、さる所おは  
します帝にて、「いと興ある事なり。さらば行け。道隆は豊樂院、道兼は  
仁壽殿（ヒジツ、テン）の塗籠、道長は大極殿へ行け」と仰せられければ、よその君た  
ちは、びんなき事をも奏してけるかなと思ふ。また承らせ給へる殿  
ばらは御氣色變りて、益（マシ）なしと思したるに、入道殿はつゆさる御氣  
色もなく、私の従者をば具し候はじ。この陣の吉上まれ、瀧口まれ、  
一人昭慶門まで送れと仰言たべ。それより内には、一人入り侍らん。  
と申し給へば、「あかしなき事」と仰せらるゝに、「げに」とて、御手箱にお  
かせ給へる刀申して立ち給ひぬ。今二所もにがむく、各おはしま  
しぬ。

子四つ

(一)道隆。

すちなし  
(二)道兼。

子四つと奏して、かく仰せられ議する程に、丑にもなりにけん、道  
隆は右衛門の陣より出でよ。道長は承明門より出でよ」とそれをさ  
へ分たせ給へば、しかおはしましあへるに、中關白殿陣まで念じて  
おはしたるに、宴の松原の程に、その物ともなき聲どもの聞ゆるに、  
すちなくして歸り給ふ。栗田殿は露臺の外まで、わなゝくゝおはし  
たるに、仁壽殿の東おもてのみぎりの程に、簷とひとしき人のある  
やうに見え給ひければ、物も覺えて、身の候はゞこそ仰言も承らぬ。  
とて、各立歸り参り給へれば、御扇をたゞきて笑はせ給ふに、入道殿  
はいと久しう見えさせ給はぬを、いかゞと思し召す程に、ぞいとさ  
りげなく事にもあらずげにて参らせ給へる。いかに、くゝと問はせ  
給へば、いとのかに、御刀にけづられたる物を取具して奉らせ給  
ふに、「こは何ぞ」と仰せらるれば、「たゞにて歸り参りて侍らんは、あか  
し候まじきによりて、高御座の南おもての柱のもとをけづりて候



なり」とつれなく申し給ふに、いとあさましう思し召さる。こと殿たちの御氣色はいかにもなほなほらで、この殿のかくて参り給へるを、帝よりはじめ感じの、しられ給へど、羨ましきにや、またいかなるにか、物も言はでぞ候ひ給ひける。なほ疑はしく思し召されければ、つとめて藏人して、けづりくづを遣して見よ、と仰言ありければ、もて行きて、おし附けて見たうびけるに、つゆたがはざりけり。そのけづりあとは、いとけざやかに侍るめり。末の世にも見る人は、なほあさましき事にぞ申し、かし。

—大鏡—

一四 東下り

昔、男ありけり、京にありわびて東に行きけるに、伊勢、尾張の間の海づらを行くに、浪のいと白くたつを見て、

いとゞしく過ぎにし方のこひしきに

うらやましくもかへるなみかな

となん詠めりける。

昔、男ありけり。その男、身を益なきものに思ひなして、京にはあ



八 橋尾形光琳筆

じ、東の方に住むべき國もとめにとて行きけり。もとより友とする人、一人二人して行きけり。路知れる人もなくて

惑ひ行きけり。三河國八橋といふ所に至りぬ。そこを八橋と言ふことは、水のくも手に流れ分れて、木八つ渡せるによりてなん八橋とは言ひける。その澤のほとりの木蔭におりゐて、餉かゝいひけり。その澤に燕子花いと面白く咲きたり。それを見てある人のいはく、かきつ



ばたといふ五文字を句の上にするて、旅の心を詠め」と言ひければ詠める、

から衣きつゝなれにしつましあれば

はるくゝ來ぬるたびをしぞ思ふ

と詠めりければ、皆人、餉の上に涙落してほとびにけり。

行きくゝて駿河國に至りぬ。宇津の山に至りて、我が入らんとす

る路はいと暗う細きにつた、かづらは茂りても、心細く、すゝろな

るめを見る事と思ふに、修行者あひたり、「かゝる路にはいかでかお

はする。」と言ふに見れば、見し人なりけり。京にその人の御許にとて、

文書きてつく。

駿河なるうつ山邊のうつゝにも

ゆめにも人に逢はぬなりけり

富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降りり。

(-)安倍郡と志太郡との境。

鹽尻

時しらぬ山はふじの嶺いつとてか

かのこまだらに雪の降るらん

その山はこゝにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらん

程して、なりは鹽尻

のやうになんあり

ける。なほ行きくゝ

て、武藏國と下總國

とのなかに、いと大

きなる河あり、それ



富士 (尾形光琳筆)

を角田河と言ふ。その河のほとりに群れゐて思ひやれば、限りなく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡守はや舟に乗れ。日も暮れなん」と言ふに乗りて渡らんとするに、皆人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さるをりしも、白き鳥の嘴と脚とあかきし



ぎの大ききなる、水の上遊びつゝ、魚イサをくふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人見知らず。渡守に問ひければ、「これなん都鳥」と言ふを聞きて、名にしおはゞいざこと問はん都鳥  
 わが思ふ人はありやなしやと  
 と詠みければ、舟こぞりて泣きにけり。  
 —伊勢物語—

一五 世界の四聖

高山林次郎

生れて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる。聖人にあらざれば誰かこれを能くせんや。釋迦、孔子、ソクラテス、キリストの四人、世呼んで世界の四聖と稱す。宜なるかな。  
 釋迦は西曆紀元前凡そ六百年の頃、印度伽毘羅國の王家に生る。父は淨飯王、母は麻耶夫人。その本名は悉達多といふ。釋迦は伽毘羅王家の族名にして、佛陀はその出家成道後の尊號なり。釋迦身は一

〔評論家、思想家、樗牛と號した。山形縣の人。明治三十五年（一八六二年）歿。年三十二。〕  
 一代の宗師  
 百世の儀表  
 〔伽比羅國とも書く。〕

成道

正覺  
 巡錫す  
 〔ガンジス河の支流。〕

元々  
 歸命の大道  
 一世の木鐸となる



釋迦

國の太子に生れけれども、夙に思を人生の問題に潛め、二十九の歳その妻子を棄て、王城を遁れ、山林に隠れて道を修むる事六年、終に人生の奧義を究め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、北天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘歳にして、跋提河〔ハダ〕の畔に歿しぬ。今の佛教は即ち釋迦一代の教訓に基づく。蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。されど徒に思索の高遠を喜びて、人生の疑問に適切ならず。偏に幽玄なる談理と慘憺たる苦行とによりて、安心の道を求めたり。その流派を樹て、相争ふところは、畢竟名目の優劣のみ。未だ一世の元々をして歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この間に生れ、その浩大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て一



風采を想望す



定公の時に至り、擢てられて大司寇の職に就く。治績大いに舉り、内外その風采を想望す。時に齊王、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ひざらしむ。孔子時運の非なるを見、五十

門下の高足  
蕩然として地を拂ふ

六歳の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて、四方の遊説を試みぬ。當時の支那はいはゆる春秋戰國の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を拂へり。或は臣にしてその君を弑する者あり、或は子にしてその親を害する者あり、強は弱を呑み、大は

教化の陵夷

狂瀾を既倒に廻らす

老脚蹉跎

(一) 衛の人。孔門十哲の一。

下學して上達す

(二) 西紀前四七〇年—三九九年。  
(三) 古代ギリシヤの都府。

小を併せ、權力の外に道義あるなし。教化の陵夷、風俗の頽廢、未だ曾てこの時の如きはあらず。孔子既に志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に廻らさんとす。志や高且大なりと謂ふべし。かくの如くにして四方に漂浪する者と十三年、時非にして道容れられず、世また耳を名教に傾くる者なし。是に於て已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じて曰く、「嗚呼、吾が道遂に窮す。世遂に吾を知る者なきか。」と。門弟子貢慰めて曰く、「何ぞ夫子を知る者なからんや。」孔子答へて曰く、「天を怨みず、人を尤めず、下學して上達す。我を知る者はそれ天か。君子は世を没するまで名の稱せられざるを疾む。吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや。」と。後幾許もなくして歿す。時に年七十三。  
(四) ソクラテスはギリシヤのアゼンス府に住める一彫刻師の子なり。その生れたるは凡そ紀元前四百七十年の頃にして、釋迦、孔子と年



詭辯學派

を隔つること二三十年に過ぎず。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出てたるは奇なりと謂ふべし。ギリシャの當時はいはゆる詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の争に止り、道徳は空文の上へのみ貴ばれたり。その状、なほ釋迦當時の印度の如く、學問は人生社會の實際に關して殆ど裨益するところなかりき。ソクラテスは慨然として時弊の救済を以て自ら任じ、盛に道を講じ、理を談じ、諄々として倦まず。詭辯學者の輩に遇へば、則ちその獨得の論法を以て辯難攻撃して一步も假借せず。侃諤の正義、その稀代の雄辯と相俟ちて一世を風靡せり。

諄々として倦まず  
侃諤の正義  
喬木は風に折らる  
議論す

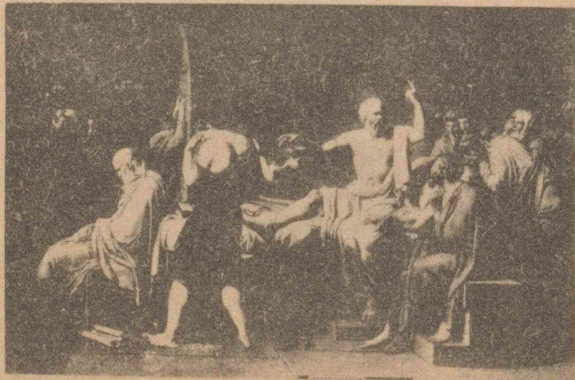
然るに「喬木は風に折らる」といふ喩にもれず、群小のソクラテスに快からざる者相謀りて、國法に背ける者としてソクラテスを讒訴せり。その訴狀に曰く、「ソクラテスは國教を信ぜずして異教を創め、以て人心を惑亂せり。宜しく國法によりて死刑に處すべし」と。ソ

不遜

何爲るものぞ

「ギリシャの醫藥の神。アポロの子。」

クラテスがこの讒訴に對する抗議は、實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふるところ、語々百世の眞理ならざるはなし。然れども判官はソクラテスを以て傲慢不遜なりとなし、死刑を宣告せり。ソクラテス泰然として驚かず、曰く、「命のみ」と。その獄中にあるや、常に門弟子を集めて、生死、靈魂、未來の事を説き、人の脱獄を勸むる者に對しては、乃ち答へて曰く、「余は唯正義に導かれんのみ。死また何爲るものぞ。人生の幸福は靈魂の上にあるを知らずや」と。終に従容として毒を仰いで歿す。將に歿せんとするや、弟子遺言を求む。ソクラテス曰く、「爾一雞を以てアスクレピアスの神



ソクラテス



謝を致す

に捧げよ。と蓋し、曾て病みし時平癒を祈りて、謝を致す事を忘れしが爲ならん。ギリシャの聖人ソクラテスはかくの如くにして逝きぬ。年七十。

キリストは本名をヤソと言ふ。キリストとは膏灌がれたるもの。

〔イギリスの委任統治國パロスタインの首都イエルサレムの南約八キロメートル〕



といふ義にして、教徒の奉れる尊稱なり。ユダヤのベツレヘムに生る。その生後四年を以て西曆紀元第一年と成す。父はヨセフと呼べり。賤しき木匠にして、母をマリヤといふ。長じて三十歳の頃、預言者ヨ

寧日なし

ハネの洗禮を受けて、始めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間ユダヤの各地を歴遊し、諸の迫害に屈せずして、その福音を傳へたり。抑、當時はローマ帝國の榮華正にその極に達し、禍亂の萌芽内に胚胎し、災異頻りに至りて、天下寧日なし。殊にキリストの故國たるユダ

收斂

放縱の俗

救世の使命

晏然

ヤは、久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒に珍奇なる淫祠を崇拜して益、放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄びて空しく人を惑はすのみ。是に於て一世の人心は悉く、偉人の現出して、この暗黒なる社會を照破せん事を渴望せり。キリストこの間に



高山山次郎

生れ、自ら救世の使命を負へる神の子と稱し、昂然としてその偉大なる新教理を宣傳せり。遠近靡然としてこれに赴く。僧侶、學者、官吏等はこれを喜ばず、以て猥りに新法異説を唱へて民を迷はす者なりとなし、キリ

ストを捕へて磔殺の刑に處す。キリスト豫めこの事あらんを慮り、晏然として騒がず、靜かに祈りて曰く、「神よ、彼等を赦せ。彼等はその爲すべきところを知らざればなり」と。その刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧て曰く、「イエルサレムの女子よ、吾が爲に哭く事勿れ。」



唯己と己の子との爲に哭けと。かくの如くしてキリストは三十三年の短命を以て、十字架上の露と消え去りぬ。キリストの死後、その弟子等は激烈なる迫害に抵抗して、その教を天下に弘む。キリスト教即ちこれなり。

以上は四聖の略傳なり。その人物、事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し、崇拜すべきところなり。四聖のうち釋迦を除きては、何れも軼軻不遇の裡にその生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、その經綸を抱いて空しく咏歎の間に歿せり。ソクラテスとキリストとは何れも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架上に磔殺せられたり。悲惨なりと謂ふべし。然れどもこれ等の人々の志すところは天下後世にあり、現世の禍福と一身の安危とは、毫もその顧慮するところにあらず。故にその死に就くや、晏然としてなほ歸するが如し。孔子はその身の不幸を憂へずして、却つ

軼軻不遇

て「吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えん」と嗟歎せり。釋迦は衆生の爲にその妻子と王位とを抛ちて、食を路傍に乞へり。ソクラテスは死罪の脅迫に遇うて、揚言して曰く「正義を信ずる者に取て、死はた何爲るものぞ。吾をして一日の生あらしめんか、その一日即ち國民の迷を覺さるべからず」と。キリストは己を罪に陥るゝ者の爲に神に祈りたり。嗚呼、何ぞその慈悲の浩大にして無邊なる。

— 樗牛全集 —

一六 千里が竹

近松門左衛門

船路の末も知らぬ火の、筑紫は雲に埋めども、あとに擁護の神風や、千波萬波を押切つて、時もたがへず親子の船、唐土の地にも著きにけり。鄭芝龍一官は、故郷へ歸る唐錦、裝束引きかへ妻子に向ひ、「我が本國と言ひながら、時移り代變り、天下悉く、李蹈天が引入れにて、

(一)江戸時代の文豪、本名は杉森信盛、集林子と號した。享保九年(一七三四年)歿。  
(二)明末の人鄭芝龍、西暦一六四四年(一六四五年)歿。  
(三)康熙元年(一六六二年)歿。  
(四)明朝の將軍、應、明帝を弑した。



(一)明朝の忠臣。司馬大將軍。康熙十七年(西紀一六七八)年歿。  
(二)明の熹宗の時。西紀一六二五年。  
(三)錦祥女。甘輝の妻。

(四)明の將軍。初め鞆に降り、後、鄭芝龍に應じた。

(五)鄭成功。國姓爺といふ。

鞆夷の奴となり、昔の朋友一族とて、誰を尋ねんやうもなく、司馬將軍吳三桂が生死の様子も知れざれば、何を以て義兵の旗を揚げ、いづくを一城に立籠るべき所もなし。然るに某去る天啓五年、この國を立退き日本へ渡る時、二歳になりし娘の子を、乳母の袖にすて置きしが、その子が母は産落して當座に死す。かくいふ父は、八重の汐路の中絶えて、いつ父母も知らぬ身が育てば育つ草木の、雨露の恵に長ずる如く、天地の父母の助にや、成人して今五常軍甘輝といふ大名、一城の主の妻となれる由、商人の便りに聞及ぶ。頼む方はこればかり、親を慕ふ心あつて娘さへ承引せば、婿の甘輝もやすくと頼まるべし。これより路の程百八十里、うち連れては人も怪しまん。我一人路をかへ、和藤内は母を具し、日本の漁船の吹流されしと、頓智を以て人家に憩ひ、追ひつくべし。これより先は音に聞ゆる千里が竹とて、虎の栖む大藪あり。それを過ぐれば、潯陽の江、これ猩々

(一)支那湖北省嘉魚縣。  
(二)蘇東坡。

の栖む所。風景聳えし高山は赤壁とて、昔東坡が配所ぞや。それよりは甘輝が在城獅子が城へは程もなし。その赤壁にて待ちそろへ、萬事をしめし合すべし」と、方角とても白雲の、日影を心おぼえにて、東西へこそ別れけれ。

たづきも知らぬ

ほうど我をぬかす

教にまかせ和藤内、人家をもとめ忍ばんと、かひなくしく母を負ひ、たづきも知らぬ岩巖石、古木の根ざし瀧津波、飛びこえ跳ねこえ、飛鳥の如く急げども、末はてしなき大明國、人里絶えて廣々たる、千里が竹に迷ひ入る。和藤内ほうど我をぬかしなう母ぢや人、この脛骨に覚えあり。もう四五十里も來ませうが、人にも猿にも逢ふ事か、行けば行く程藪の中うむわかつたり、方角知らぬ日本人、唐の狐がなぶるよな。魅さば魅せ、宿なし旅の行きつき次第、小豆の飯の相伴、と根笹、大竹押分け、踏分け、なほ奥深く行く先に、怪しや數萬の人聲、攻鼓、攻太鼓、らつば、ちやるめら高音をそらし、ひようくとこそ聞



えけれ。すは我々を見咎めて、敵の取巻く攻太鼓か、または狐のなす  
わざか」と、茫然たるそのをりふし、空凄じく風起り、砂を穿ちどうど  
うどう、竹葉ちくはさつと巻立てく、吹折る竹は劍の如く、凄じなんども  
愚かなり。

和藤内ちつとも臆せず、讀めたりく、さては異國の虎狩な。あの  
鐘、太鼓は勢子の者。此所は聞ゆる千里が原、虎嘯こけば風起る、猛獸の  
所爲と覺えたり。二十四孝の楊香やうかうは、孝行の徳に因つて自然と逃れ  
し悪虎の難。その孝行には劣るとも、忠義に勇む我が勇力、唐へ渡つ  
て力はじめ、神力益、日本力、刃で向ふは大人氣なし。虎は愚か象でも  
鬼でも一挫ぎと、尻ひつからげ身繕ひ、母を圍うて立つたるは、西天  
の獅子王も、畏れつべうぞ見えてける。

案にたがはず吹く風と、共に暴れたる猛虎のかたち、藤根に面を  
すりつけく、岩角に爪磨つめぎたて、二人を目がけいがみ懸るを事と

讀めたりく  
一、虎嘯こきて谷  
風至り、龍舉  
す。景雲屬  
す。淮南子  
二、晉の人。十四  
歳の時赤手で  
虎を搏つて父  
の難を救つた。

いがみ懸る

もせず、弓手に撲り馬手に受け、もぢつて懸れば身をかはし、撓めば  
ひらりと乗移り、上になり下になり、命競べ根競べ、聲を力にえいえ  
いえい。虎の怒毛、怒聲、山も崩る、如くなり。和藤内も大童、虎も半分  
毛をむしられ、兩方共に息疲れ、石上に突つたてば、虎も岩間に小首  
を投げ、大息ついたるその響、ふいがう吹くが如くなり。

母藪蔭より走り出で、やあく、和藤内、神國に生れて、神より受け  
し身體、鬚膚、畜類に出で合ひ、力立して怪我するな。日本の地は離る  
るとも、神は我が身にいす。川、大神宮の御祓、納受などかなからん  
や」と、肌はだの護符まごりを渡さるれば、げに尤もと、押戴おしおき、虎に差向け、差上ぐ  
れば、神國神祕のその不思議、猛りに猛る威勢いせいも、忽ち尾を伏せ耳を  
垂れ、じり、く、と四足を縮め、恐れわな、き岩洞いんどうに匿れ入る、尾筒  
をつかんで跳ねかへし、打伏せく、ひるむ所を乗懸り、足下にしつ  
かと踏まへしは、天の斑駒、素戔嗚尊の神力、天照神の威徳ぞ有難き。



風來人

笑壺に入る

ほざく

いかな事

かゝる所に勢子の者群がり来るその中に大將と思しき者大音揚げ「やあ〜うぬはいづくの風來人我が高名を妨ぐるその虎は忝くも主君右將軍李蹈天より韃靼王へ献上の爲狩出したる虎なるぞ早々渡せ異議に及ばぶち殺さんしやぐわん〜」とわめきけり李蹈天と聞くよりも願ふところと笑壺に入り「やあ餓鬼も人數しをらしい事ほざいたり身が生國は大日本風來とは舌長し。さ程ほしがる虎ならば主君と頼む李蹈天とやら石花菜とやら此所へ突出し詭言させいぢきに逢うて用もある。さもないうちはいかな事ならぬ〜」とねめつくる「やあものな言はせそ討取れ」と一度に劍をはらりと抜く「心得たり」と守を虎の首にかけ母の側にひつ居うれば繋ぎし如くに働かず「おゝ心安し」と太刀差しかざし群がる中に割つて入り八方無盡に割立て〜撫てまくる。

勢子の大將安大人官人引具し立歸り「おのれ老耄餘さじ」と一文

色めき立つ

二王立

せがれ(倅)  
(長崎縣肥前國)北松浦郡  
 平戸島にある

字に切懸る。なほも神明擁護の驗神力虎に加つてむつくと起きて身慄し敵に向ひ齒を鳴し猛りうなりて飛懸る「こはかなはじ」と安大人勢子の者がさいたる劍かり鉾數槍手に當るを幸ひに投附け投附け打懸くる。虎は神力自在を得劍を宙にひつくはへひつくはへ。岩に打當て微塵になす。刃の光玉散る霞氷を碎くに異ならず。打物盡くれば官人ども色めき立つて迷惑ふ。後より和藤内「どつこい遣らぬ」と顯れ出で安大人が素首をつかんで差上げくる〜と振廻しえいやつと打附くれば岩に熟柿を打つ如く五體ひしげて失せにけり。この勢に官人ばら後へ戻れば惡虎の口先へ行けば和藤内二王立に突立つたり「あゝ申し御堪忍御免々々」と手を合せ土にくひつき泣きゐたり。和藤内虎の背を撫でて「うぬらが小國とて侮る日本人虎さへこはがる日本の手並を覺えたか我こそ音に聞えた鄭芝龍老一官がせがれ九州平戸(平戸)に成長せし和藤内とは我が事



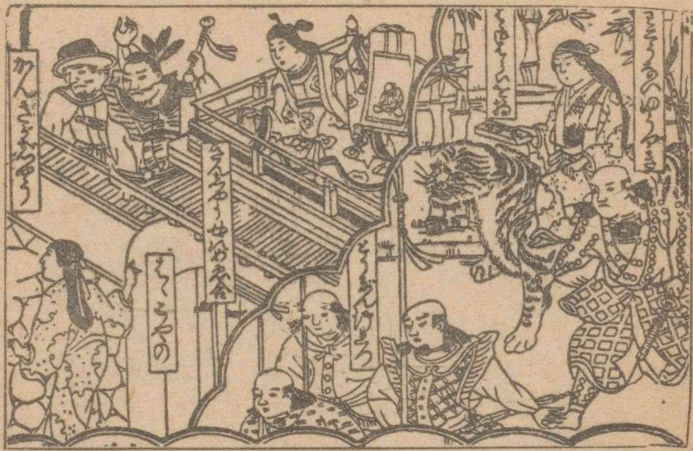
なり。先帝の妹宮梅檀皇女にめぐり逢ひ、三世の恩を報ぜん爲、父が故郷に立歸り、國の亂れを治むるなり。さあ、命惜しくば身方につけ、否と言へば虎の餌食。否か、應か」とつめかくる。なう、なんの否で御座りましよ。韃靼王に従ふも李蹈天に従ふも命が惜しさ。向後お前の御家來ども、お情頼み奉る」と、地に鼻つけて畏まる。

出かした

「お、出かした、さりながら、我が家來になるからは、日本流に月代剃つて元服させ、名も改めて召使はん」と、指添のちひさがたなはづし、これも當座の早剃刀、母も手々に受取つて、並ぶ頭の鉢の水、揉むや揉まらずに無理無體、片端そるやらこぼつやら、絲鬢、厚鬢、剃刀次第、瞬く間に剃りじまひ、二櫛半のはらけ髪、頭は日本ひげは韃靼身は唐人、互に顔を見合せて、頭ひやつく風引いて、くつさめ、むら雨、むら雨と、涙を流すぞ道理なる。親子どつとうち笑ひ、そろひもそろうた供廻り、名も日本に改めて、何左衛門、何兵衛、太郎、次郎、十郎

はらけ髪

今參



國姓爺正本挿畫

まで、面々が國どころ頭字に名のり、二行に立つてぼつたてろ、承り候と、御先手の手振の衆、ちやくちう左衛門、東蒲塞右衛門、呂宋兵衛、東京兵衛、暹羅太郎、白城次郎、ちやるなん四郎、ほるなん五郎、うんすん六郎、すん吉九郎、もうる左衛門、じやが太郎兵衛、さんとめ八郎、英吉利兵衛、今參の御供先、あとに引馬、虎斑の駒、母を助けて孝行の名を取る、口取る、國を取る、譽は異國、本朝に、踏跨げたる鞍あぶみ、虎の背中のうち乗つて、威勢を千

里に顯せり。

— 國姓爺合戦 —



自修文

教化上より見た近松

藤村 作

(一)國文學者、文學博士、東京帝國大學名譽教授、明治三十五年(一八八八)福岡縣に生れた。  
時代淨瑠璃、歴史上の英雄、偉人等を題材にとつた淨瑠璃に對する淨瑠璃に對する職責、職務上の責任。

教化の目から見れば、巢林子の時代淨瑠璃は、悉く武家精神の通俗宣傳たるものである。元祿時代は、主従の上下關係と軍人たる職責の性質とを基礎として成立した武士精神と、個人の福利を營むを本務とした町人精神とが階級的に對立して、未だその相互の浸潤感化を著しくしなかつた時代である。武士も武士らしい武士であれば、町人も町人らしい町人であつた時代である。その後兩階級の間、兩精神の浸潤感化が次第に行はれて來たのである。武士の町人化は、武士本位の時代であつたから、武士の墮落として、政治當局者や識者の憂となつたのであるが、町人の武士化は、それが階級制を壞すやうな事でない限り、多く問はれなかつた。のみならず、實際町人の徳操品位を高めたものは、その感化であつたのである。この武士精神を町人間に宣傳して、町

識者  
見識のある人。  
問はれなかつた。  
答められなかつた。

尤なる者  
優れた者  
源頭  
みなもと。

人の武士化を促した上に、近世のいはゆる通俗文藝の功の多い



近松門左衛門(坂内青嵐筆)

事は、固より言ふまでもあるまい。巢林子の如き、この方面に於ても、蓋しその尤なる者である。彼は新淨瑠璃の源頭に立つ人で、彼によつて淨瑠璃文學は大成されて、爾後の作者は、一人として彼の直接間接の感化を受けてゐない者はない。極端に言へば、他は悉く模倣追随者である。かうして彼によつて大成された新淨瑠璃時代物の内容は、殆ど彼以來固定した有様であるが、その中心たるものは、武士道精神に外ならぬ。時代の選び方は、王朝時代であらうと武家時代であらうと、また場所が我



が國であらうと外國であらうと、説話の根幹となつてゐる精神は、常に近世武士道精神である。

この精神を表現するに、彼は彼のいはゆる「慰み」を目的とした民衆的な藝術の衣裳を以てした。公卿であらうと、武士であらうと、町人的な性質の一部をもたしめる事を必ず試みてゐる。彼の爲した時代錯誤や、階級混同は、彼の無智無學から起つたのではなくして、彼の藝術上に意識した目的から來た事である。彼はこれくらゐな事を知るだけの歴史上の知識はもつてゐたに相違ないが、無智な民衆の娯樂を目的とした爲に、これを犯す事を辭しなかつたのであらう。この事を教化上から考へてみれば、寧ろ彼の藝術の強みである。

彼の藝術意識が、馬琴などの如き儒教風の功利的教訓主義のそれになかつた爲に、彼の藝術は馬琴物の如き淺膚露骨な教訓物に墮せずに濟んだ。そして教訓物に墮さなかつたところが教

時代錯誤  
時代や時期を誤ること。時  
代上の矛盾。  
藝術意識  
詩歌、音楽、美  
術、演劇など  
の藝術に對す  
る心のはたら  
き。  
功利主義  
十八世紀十九  
世紀にわたつ  
てイギリスの  
ベンサムやミ  
ルの唱へた倫  
理の爲の結果  
が最大多数の  
人の最大幸福  
となるのを以  
て善と定めら  
れる主義。

化上一層有效であつたに相違ない。眞の感化は期待しない所に多くある。文藝も教訓物よりは却つて教訓物でないものに多くの教化が期待される事が多い。武士道精神を主要内容として、通俗的で受容れ易く、美しく麗しい色と甘い味とを附けられた娛樂的な藝術の形で創作され、作毎に一代の人心を沸かしたためであるから、その社會教化上の効果の少くなかつた事は、想像するに難くないのである。唯政治家の事業の如く、若しくは學者の著述の如く、その効果を計る尺度のない爲に、世人に看過され易いが、若し此所にこれ等を平等に計量し得べき方法があるならば、彼の直接間接の社會教化上に於ける業績の、いかに偉大なものであつたか、明瞭に知り得られるであらう。

— 上方文學と江戸文學 —



(一)評論家、傳記作家。明治二十五年(一八九二年)鳥取縣に生れた。猫額大

### 一七 南阿の獅子

澤田 謙

現代日本の惱みは、即ち十九世紀英國のそれである。猫額大でしかも貧瘦の地に過大の人口を養はねばならなかつた英國は、人口問題と食糧問題とに責めさいなまれてかくては自滅の途をたどるより外ないとまで思はれてゐた。その時だ、

「我は我が運命の開拓者なり」

と叫んで、幾多有爲の冒險的青年が起ちあがつたのは、かくしてユニオン・ジャックは大洋の朝風に翻つた。英國國旗に日没なしと言はれる大英帝國を建設したのは彼等であり、不世出の英雄兒セシル・ローヅを生んだのも、實にその冒險的精神であつた。

黒船來る。水師提督ペリーの率ゐる黒船の影に、日本の上下が震駭した嘉永六年——その年の七月七日、セシル・ローヅは、牧場の緑

(二)イギリスの政治家。西紀一八〇三年—

(三)一八五一年。

鎌首を擡げる

濃やかなビショップス・ストリートフォードに、一牧師の五男として生れた。小學校から中學校を経て、彼の學業は寧ろ平凡であつた。彼の偉大な精神力がむくくと鎌首を擡げたのは、十七歳にして肺患の爲、醫師から六箇月しかない餘命を宣告された時であつた。

「よし、何れは亡き命なら、我が最後の血の滴りを光輝ある英國民族の運命の爲に捧げよう。」

そして彼は單身南阿へ向つたのであ



セシル・ロー

さうらう(一)ナタール州。印度洋に臨み南阿聯邦の重要門戸をなす港。

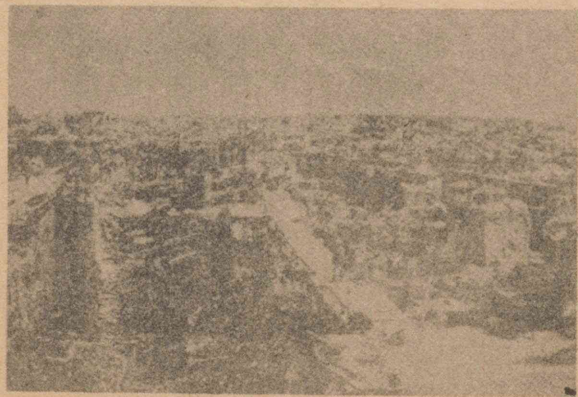
長身瘦軀、顔面蒼白な少年がさうらうとしてダーバンの港に上陸する姿を見た時、何人がよく、後世南阿の征服者たるべき獅子王の運命を想像し得たらう。しかし、彼の心魂に宿る大望と、熱帯の原



始的な空氣とは、忽ちにして病魔を征服した。そして其所に、大自然と格闘せんとする鐵の如き肉塊が出現したのだ。

彼の囊中には、唯數冊の古典と採掘具としかなかつた。しかし、彼は平然として牛車に乗つた。無盡藏のダイヤモンドを藏すると言はれた(1)パール河畔へ。

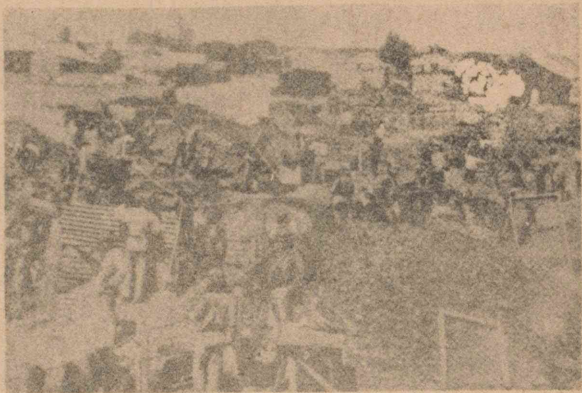
それはさながらダイヤモンド狂時代であつた。その夜光珠を掘當てんものと、野獸の如き人々は、東から西から北から南から群がり集つてゐた。それは寧ろ人肉の争闘であつた。が、彼は怖れなかつた。屈しなかつた。いや、それにうち克つたのだ。彼の振上げ



廣野を蜂の巢のやうにしに開發當時の  
レバンキ-剛金坑

(1) 南アフリカ東部に發し、西流してオレンジ河となり大西洋に注ぐ。

る力強い鶴嘴の響。



家を移して剛金を石崗を掘つてゐるころ(レバンキ)  
の街路下は剛金を含んだ岩から成つてゐる

八年の惡戰苦闘の後、ロイツは早くも、南阿の全ダイヤモンド坑の支配者となつてゐた。往年の貧少年は、二十歳臺で既に世界的大成金となつたのである。

思ふに人生の危機は、失敗の奈落到んだ時でなくて、寧ろ成功の絶頂に立つた時にある。それは俄に産を成した小成金どもの、狂癡に近い醜態を見ればすぐわかる。況や、彼は三十歳前にして早くもこの富を積んだのだ。暖衣飽食は意のままである。危機は即ち其所に伏在する。しかし、幸にして彼の胸中には大望が燃え



(一) アフリカ東南部の大河。源をアンゴラに發し、S字形に屈曲して流れてモザンビク海峡に注ぐ。

虎視たんく  
(虎視)

てゐた。金が何だ。彼は世界を見てゐたのだ。

「地球は狭い。今にして廣大な領土を開拓するのでなければ、英國にはやがて後悔する日が来るであらう。」

そして地圖を指さしながら、彼は親しい友に言つた、

「少くともザンベジ河以南は、我が英國の版圖としなければならぬ。」

それは殆ど南阿の全部である。面積にして約三百十二萬平方キロメートル。英國本土の約十三倍に當る。假に大英國の力を以て、無人の野を切拓くやうに開拓して行つたとしても、非常な年月と勞力とを要するであらう。然るにローツはそれを、しかも慄悍な土著民や、虎視たんくたる獨佛、伊蘭、白葡などの勢力と戦ひつゝ、獨力を以て建設して行かうといふのだ。彼がこれまでに積上げた巨富は、この大事業完成の爲の、些かの準備金に過ぎないのだ。

何たる夢想。しかし夢想こそは、すべての大事業の原動力である。

セシル・ローツは先づケーブ植民地議

會議員となり、次いでその首相となつた。

かくして南阿の南端ケーブタウンに、し

つかと足を据ゑたローツが、眼を北に放

てば、其所に行方を遮るものは、獨帝ウイ

ヘルム二世の後援を受け、快傑クリューゲ

ル大統領によつて率ゐられる南阿共和

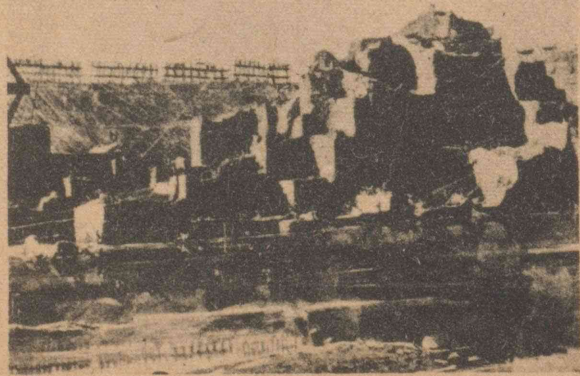
國である。

いかにしてこの障碍を突破すべきか。

豪膽セシル・ローツと、俠豪クリューゲルと

の一騎打こそ、南阿史上に於ける最も緊張せる一節であつた。

しかも最初の鬭争に於て、ローツは一敗地に塗れたのだ。いや、敗



部内の坑石剛金ーレバンキ

(一) ケープ州の都會。古來交通の要地。

(二) 第一世の孫。第三代ドイト皇帝。西紀一八五九年まで在位。西紀一八五九年(一)。(三) トランスバールの大統領。西紀一八二〇年(一)。



れたのは彼ではなかつた。勢に逸れる盟友ゼームソン博士の失敗だつたのだ。が、飽くまで男性的な彼は、卑怯に責任を回避しようとはしなかつた。

「南阿の征略に關する限り、すべての責任は我が輩にある。」

そして彼は、自ら全責任を負うて、一旦政界から引退せざるを得なくなつた。十有幾年營々として築き上げた政治的地盤は、かくして崩壊したばかりでなく、彼は英國議會の査問に附せられる身となつたのである。

しかし、彼は平然としてゐた。彼は卓子の上の黒ビールをぐつと飲乾すと、やをら起ち上つて、フロックコートを著た査問會の紳士たちを睥睨しつゝ叫んだ、

「この激烈な植民競争の時代にあつて、諸君はいかなる國策をもつてをられるか。」

そして徐に説起す彼の大理想。恰も教授が學生に講ずる如く、諄々として説去り説來る彼の熱辯に、委員たちは唯耳を傾けて聽聞するのみである。

見よ、査問さるべき者は誰ぞ。主客は顛倒した。査問さるべきローツは、今や堂々と議長的位置に坐つて、査問委員たちの認識不足を講義しつゝあるのだ。

説終つて彼は、も一度委員たちを見廻した、

「さあ、もう質問はありませんか。御用があれば今のうちに言つて下さい。今後も成るだけ上京いたしたいが、南阿には我が輩のなすべき仕事が残つてゐるので、質問はありませんね。ではさやうなら。」

無造作にフェルト帽をつかんで、さつさと南阿に引上げてしまつた。

認識不足



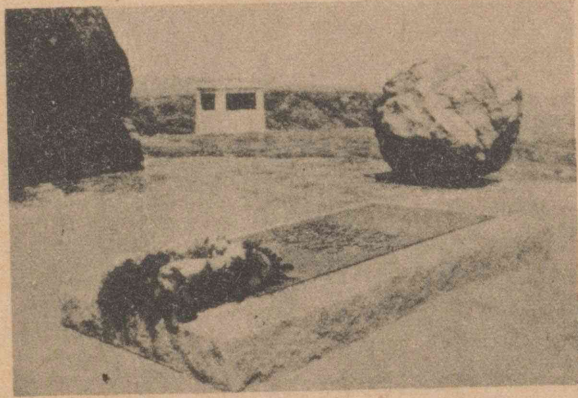
(一)イギリス人に  
 壓迫されたボ  
 ンシア人のト  
 は、ドイツと  
 結ぶオレン  
 自由國と共に  
 西紀一八九  
 年イギリスと  
 戦つたが、敗  
 れてイギリス  
 の植民地とな  
 った。  
 (二)ケープ州の都  
 河の上流に臨  
 み、金剛石の  
 産額世界第一  
 である。  
 手ぐすね引く

燎原の火

南阿に歸つて來た彼は、直ちに政治的紛亂のうちに身を投じな  
 ければならなかつた。南阿戦争がそれだ。  
 「ローツよ、來らば來れ。彼がキンバレーの土を踏んだ瞬間、我等は  
 彼を捕縛して籠の中に入れ、市中を晒者として引廻した上、直ち  
 に殺害するであらう。」  
 共和軍は手ぐすね引いて待構へてゐた。しかし豪氣な彼は、敢然  
 としてその渦中に飛込んだ。そして直ちにキンバレーに八百の義  
 勇軍を組織して、馬上豊かに叱咤する彼の雄姿。  
 南阿戦争は遂に彼の勝利に歸した。英國の勢力は北に伸びた。北  
 へ。北へ。彼の勢力はさながら燎原の火のやうに、南阿大陸に廣がつ  
 て行く。その間僅かに十二年。嘗ては夢想と嘲けられたザンベジ河  
 畔に、早くも彼の人馬は起つたのである。  
 彼は我が明治三十五年三月二十六日、享年五十にして、ケープタ

會心の大事業

(一)南部アフリ  
 カの北部に位  
 する地方で、  
 シル・ロー、  
 命名に因んで  
 全名を分つて  
 北域を分つて  
 と南ローデシ  
 ヤとする。



(上丘ポットマ)所墓のゾーロ・ルシセ

ウンに最後の息を引取つた。  
 「我が爲せる事のいかに少くして、爲す  
 べき事のいかに多かりしよ。」  
 これが彼の臨終の言葉であつた。しか  
 し、彼は生前既に、獨力を以て英國の八倍  
 に當る大領土を開拓し、それを光榮ある  
 母國の爲に捧げたのだ。男子會心の大事  
 業ではないか。  
 今もマトツポが丘の上には、彼の雄姿が  
 銅像となつて残つてゐる。南國の夕陽將  
 に大平原の彼方に沈まんとする時、馬上  
 常(一)に英雄的氣魄を、遊子の胸に喚起さずにはゐない。







(一)「うちわたす今か汐干にならるみ湯とをよはらず」夫木抄常磐井入道  
 (二)愛知縣(尾張國)愛知郡の西方にあつた江灣の稱。今名古屋市の笠寺星崎の南。  
 (三)靜岡縣(遠江國)天龍川の東岸にある。古へは西岸にあつた。  
 (四)第八十一代安徳天皇の壽永三年に當る。(二八四四年)  
 (五)靜岡縣(遠江國)藤原郡(金谷と日坂との間の坂嶺)  
 (六)「年たけてまたこゆべし」と思ひきや命なりけり小夜の中山(新古今集、西行法師)亭午  
 ながえ轅

屋は荒果てゝ、なほもるものは秋の雨の、いつか我か身のをはりなる、熱田の八つるぎ伏拜み、汐干に今や鳴海瀉、傾く月に路見えて、明けぬ暮れぬと行く路の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕汐に、ひく人もなき捨小舟、沈み果てぬる身にしあれば、誰か哀れと夕暮の、入相鳴れば今はとて、池田の宿に著き給ふ。元暦元年の頃かとよ、重衡の中將の、東夷の爲に捕はれて、この宿に著き給ひにし、その古への哀れまでも、思ひ残さぬ涙なり。

旅館の燈かすかにして、雞鳴曉をもよほせば、匹馬風にいばえて、天龍川をうち渡り、小夜の中山越えゆけば、白雲路を埋み來て、其所とも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が「命なりけり」と詠じつゝ、ふたゝび越えし跡までも、羨ましくぞ思はれける。隙行く駒の足早み、日既に亭午にのぼれば、餉參らする程とて、輿を庭前にかき止む。ながえをたゝいて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ

(一)榛原郡。  
 (二)第八十五代仲恭天皇の承久三年(一一八八年)

(三)今京都市右京區嵯峨にある天龍寺の址。  
 龍頭鷓首  
 (四)靜岡縣(駿河國)志太郡。  
 (五)「歸りくるほどはなけれど朝露の岡べの眞葛うら枯れにけり」(藤原爲家)

給ふに「菊川と申すなり」と答へければ、承久の合戦の時、院宣書きたりし咎によつて、光親卿關東へ召下されしが、この宿にて殺されし時、

昔、南陽縣、菊水。 波下流而延齡。

今、東海道、菊川。 宿、西岸而終命。

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は我が身の上になり、哀れやいとどまさりけん、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれける。

いにしへもかゝるためしを菊川の

おなじ流に身をやしづめん

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐の山の花盛、龍頭鷓首の船に乗り、詩歌管絃の宴に侍りし事も、今はふたゝび見ぬ夜の夢となりぬと、思ひつゝけ給ふ。島田、藤枝にかゝりて、岡べの眞葛うら枯れて、もの悲しき夕暮に、宇都の山べを越え



(一) 駒とめて過  
ぎぞやちれぬ  
清見瀉ちりし  
く花や波の關  
守(風雅集)法  
橋(顯昭)  
(二) 靜岡縣(駿河國)庵原郡  
(三) 富士の嶺の  
煙はなほぞ立  
ちのぼる上な  
きものはおも  
ひなりけり(新古今集)藤  
原家隆  
(四) 同縣駿東郡足  
柄村の地  
(五) こゆるぎの  
しいそたちなら  
ざし磯菜つむめ  
沖にをれ波(古今集)相模  
歌  
(六) 第九十六代後  
醍醐天皇の元  
弘元年(九一  
九一年)

ゆけばつた、楓いと茂りて路もなし。昔業平の中將の、すみかを求む  
とて、東の方に下るとて、「夢にも人にあはぬなりけり」と詠みたりし  
も、かくやと思ひ知られたり。清見瀉を過ぎ給へば、都に歸る夢をさ  
へ、通(一)さぬ波の關守に、いと涙をもよほされ、向ひはいづこ三保崎、  
興津、蒲原うち過ぎて、富士(四)の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上  
なき思にくらべつゝ、明くる霞に松見えて、浮島原を過ぎゆけば、汐  
干や浅き舟浮きて、おりたつ田子のみづからも、うき世をめぐる車  
がへし、竹(五)の下路行惱む、足柄山の峠より、大磯、小磯見おろして、袖に  
も波はこゆるぎの、いそぐとしもはなけれども、日數積れば七月二  
十六日の暮程に、鎌倉にこそ著き給ひけれ。

——太平記——

帝國實業讀本 改制新版 卷九 終

附 録



一 敬讓語(口語)

一 敬讓の意を含む文語動詞

一 國語假名遣一覽

敬讓語(口語)

一名詞

- (甲) お年 お顔 お宅 お歸り お休み おいくつ  
おいくたり お一つ お十一 御返事 御挨拶  
御機嫌 御本
- (乙) 神さま 井上さん 太郎君
- (丙) お母さま お弟さん 御尊父さま

二人代名詞

自稱	對稱	他稱	不定稱
わたくし	あなたさま	この(お)かた	どの(お)かた
わたし	あなた	その(お)かた	どなたさま
		あの(お)かた	どなた

三動詞

- (甲) 本來の敬讓語 (○印は連語を示した)  
あがる・召しあがる(食フ、飲ム)

敬讓語(口語)

あそばす・なさる(爲ル)

いらしやる(來ル、行ク、居ル)

おっしゃる(言フ)

おぼしめす(思フ、考ヘル)

くださる(與ヘル)

見える(來ル、居ル)

めす(呼ブ、着ル、穿ク、乗ル、買フ)

〔以上、尊敬の意を含むもの〕

○お出でになる、お出でなさる(來ル、行ク、居ル)

あがる、參上する(訪ネル、行ク)

あげる、さしあげる(與ヘル)

いたす、つかまつる(爲ル)

いただく、頂戴する(貰フ、食フ、飲ム)

うかがふ(聞ク、訪ネル)

ございます(居ル、有ル)

存する、存じ上げる(知ル)



たべる(食フ)

申す、申上げる(言フ)

まゐる(行ク、來ル)

拜見する(見ル) 拜借する(借リル)

拜讀する(讀ム) 拜聽する(聞ク)

○お目にかかる(面會スル) お目にかける

御覽に入れる(見セル) (以上、へり下る意、)

(丁寧の意を表すもの)

(乙) 敬讓動詞のつくり方 [○印は連語を示した]

お歌ひ	遊ばす	御苦勞	遊ばす
なさる	なさる	なさる	なさる
下さる	下さる	下さる	下さる
に、なる	に、なる	に、なる	に、なる
○見て下さる、読んで下さる		(以上、尊敬の意を含むもの)	
お届	申す	お供	申す
致す	申上げる	致す	申上げる

○お届ける、お供する (以上、へり下る意のもの)

(丙) 尊敬の意の添へ方 (助動詞「れる」「られる」を附ける)

父は英書も讀まれる。

今日は佐藤君も來られる

(丁) 丁寧の意の添へ方 (助動詞「ます」を附ける)

先生も仰つしやいます。

私からも申上げます。

先生もお歌ひになります。

私もお供致します。

紙が飛びます。

四 形容詞

(甲) 「お」を附ける。

こんなにお暑いのに……………。

六 副詞

おまめにお働きなさいませぬ。

こゆつくりなさいまし。

ここはお静かではございません。

七 「で、ある」「だ」の意

助動詞「です」、連語「でございます」などを  
用ひる。

あれは學校です。

あれは學校で ございます。

あのかたは先生で いらつしやいます。

大將はその時、少將で お出でになつた。

五 形容動詞「お」「で」を附ける

それはお珍しからう。

若しお寒かつたら……………。

あそこはお静かでせう。

あそこはお静かでしたか。

そんなにご丈夫なら、もう安心ですね。

ご丁寧な御挨拶で痛み入ります。



敬讓の意を含む文語動詞

(甲) 尊敬の意を含む語

あそばす(爲ル)  
 います、ます、まします(アル、居ル、行ク、來ル)  
 おはす、おはします(同前)  
 おほす(言フ、言ヒツケル)  
 おぼす、おぼしめす(思フ)  
 きこしめす(聞ク、飲ム、食フ)  
 しろしめす(知ル、統べ治メル)  
 たてまつる(著ル、乗ル)  
 たまふ、たぶ(與ヘル)  
 のたまふ(言フ)

(乙)

まゐる(飲ム、食フ、著ル)  
 みそなはす(見ル)  
 めす(飲ム、食フ、著ル、乗ル)  
 わたる(アル、居ル)  
 へり下る意、丁寧の意を含むもの  
 いたす、つかまつる(爲ル)  
 うけたまはる(聞ク、承諾スル)  
 さふらふ(アル、居ル)  
 きこゆ、まうす(言フ)  
 たてまつる、まゐらす(與ヘル)  
 たまはる(貰フ、受ケル)  
 はべり(アル、居ル)  
 まかる(退ク、歸ル、行ク)  
 まゐる(行ク)

國語假名遣一覽

わ (は)	わ (輪) くちわ(口輪) 纏 <small>ちま</small> おほわ(大輪) おもわ(面輪) はにわ(填輪) わ廊 くるわ(廓) わ曲 うらわ(浦曲) いそわ(磯曲) あわ(沫) あわもり(泡盛) みなわ(水沫) わけ(分) いひわけ(言分) ことわけ(辭分) おひわけ(追分) のわき(野分) わけがら(譯柄) ひきわけ(引分) わた(綿)	わた(腸) はらわた(腸) このわた(海鼠腸) こわ(聲) こわいろ(聲色) こわね(聲音) こわづかひ(聲遣) こわづくろひ(聲づくろひ) こわだか(聲高) わざ(業) しわざ(仕業) ことわざ(言葉) 諺 わり(割) ことわり(事割) 理 しわ(皺) ひわ(襪) たわら(俵) いわし(鱈) あわつ(周章) たわし(束藁子) くわの(慈姑) たわやか(嬋娟) たわやめ(手弱女) たわむ(撓む)	よわし(弱し) かわく(乾く) さわぐ(騒ぐ) すわる(坐る) あわたし(惶し) さわやか(爽か) たわいなし 語の中や下に来る「わ」は右に 舉げた他は「は」を用ひる。例 へば 川 <small>かわ</small> 澤 <small>さわ</small> 粟 <small>あはら</small> 瓦 <small>かわら</small> 雞 <small>にぼとり</small> 庭 <small>には</small> 桑 <small>さくし</small> 諏訪 <small>すわ</small> 安房 <small>あはら</small> 永久 <small>とほ</small> 繩 <small>なは</small> 障 <small>さや</small> 廻 <small>まわ</small> 變 <small>かは</small> 變 <small>かは</small> いら し等	ゐ (井) おど(井戸) おげた(井桁) おげき(井堰) おづつ(井筒) おくひ(井杭)	ゐ (い) ゐ (猪) (いのしし) ゐ (亥) (いのち) 豚 ゐ (率) (ひきゐる) 引率る 率る 將 もちゐる (持率る) 用、以	ゐ (居) ゐ (井) (井手) 堰 ゐ (田) (田舎) 田園 ゐ (守) (井守) 蟻 蟻 蟻 ゐ (居) (居去) 膝行 ゐ (鴨) (鴨居) ゐ (敷) (敷居) 闕 ゐ (雲) (雲居) ゐ (座) (座居) 位 ゐ (殿) (殿居) 宿直 ゐ (木) (木居) 基 ゐ (本) (本居) 基 ゐ (日) (日居) 參る 詣る ゐ (猪) (いのしし) 豚 ゐ (亥) (いのち) 豚 ゐ (率) (ひきゐる) 引率る 率る 將 もちゐる (持率る) 用、以
-------	--	--	--	---	---	--







いさをし(續一動)  
 ばせま(芭蕉)  
 みさま(操)  
 やまら(徐)  
 たまやか(嬋娟)  
 たまやめ(手弱女)  
 まとり(團)  
 まかす(犯す)  
 まがむ(拜む)  
 まどす(食す)  
 まさむ(治む)  
 まさむ(納む)  
 まさむ(藏む)  
 ましむ(惜しむ)  
 ましむ(教ふ)  
 まはる(終る)  
 まめく(叫く)  
 まのく(戦く)  
 まどる(踊る一躍、踴)  
 まる(居る)  
 あをむく(仰く)  
 かまを(香る一薫)  
 まます(申す)  
 しをる(撓る)  
 まかし(可笑し)  
 まし(愛し一惜)  
 くちま(口惜)  
 まさなし(幼し)

さを(竿)  
 つりざ(釣竿)  
 みさま(水竿一棹)  
 うま(魚)  
 いま(氷魚)  
 しらま(白魚)  
 いまのめ(魚の目一眈)  
 かつま(盤)  
 右の外、上には「お」を用ひ、中下には「ほ」を用ひる。例へば  
 親 沖 弟 鬼 祖父 驚  
 遅く 恐し 等  
 顔 潮 火の穂(焰)  
 水 郡 蟋蟀 透る 滯る  
 直し 遠し 通す等  
 中下に「ふ」を用ひ、文語では轉呼音で「お」を發音するものがある。例へば  
 問ふ 思ふ 買ふ 添ふ  
 願ふ 貫ふ 拾ふ 習ふ  
 訪ふ 沿ふ 乞ふ 扱ふ  
 害ふ 違ふ 誘ふ 纏ふ  
 事ふ 拂ふ 叶ふ 憂ふ

ち(父)  
 おほち(祖父)  
 ちち(祖父)  
 ちち(祖父)  
 ちち(老翁)  
 ちち(小父)  
 すち(筋)  
 うち(氏)  
 ち(路)  
 こうち(小路)  
 ひち(肘)  
 あち(味)  
 あち(鱗)  
 かち(棍)  
 かち(楮)  
 ひち(泥)  
 ふち(藤)  
 ふち(かま藤椅)  
 かうち(麴)  
 くち(琴柱)  
 候ふ 扇ぎ  
 近江 今日 昨日 倒る 貴  
 し 尊ぶ等  
 ち(七)

ねち(銀)  
 わらち(草鞋)  
 なんち(汝)  
 なめくち(蜘蛛)  
 もみち(紅葉)  
 はち(耻)  
 ふちな(蒲公英)  
 あち(紫陽花)  
 みそち(三十)  
 よそち(四十)  
 いそち(五十)  
 むそち(六十)  
 かちめ(搗布)  
 ちちむ(縮む)  
 ねち(捨る)  
 とち(閉ぢる)  
 とち(綴ぢる)  
 はち(攀ぢる)  
 よち(攀ぢる)  
 ひち(濡ぢる 泥)  
 もち(振ぢる)  
 ねち(俵る)  
 あち(味ふ)  
 「ち」を用ひるのは右の語だけで、他は「じ」を用ひる。例へば  
 虹 雉 籤 脚躰 交る  
 詰る 辱し 著し等

ず (う)

かず(數)  
 きず(傷)  
 くず(葛)  
 はず(苦)  
 ゆはず(苺)  
 もず(鴨 百舌鳥)  
 みず(蚯蚓)  
 はず(機)  
 ねず(鼠)  
 あんず(杏)  
 ず(鈴)  
 ず(錫)  
 ず(鈴)  
 ず(鈴)  
 ず(鱧)  
 ず(菘)  
 ず(大根)  
 ず(雀)  
 ず(生絹)  
 ず(漫)  
 ず(數珠)  
 ず(從者)  
 ず(條)  
 ず(礎)  
 ず(國栖)  
 こず(梢)  
 かならず(必ず)  
 たたず(竹む)

なずら(准ふ)  
 ひず(歪む)  
 ず(涼し)  
 ず(視)  
 ます(交す一混)  
 ゆず(柚子)  
 右の他は「づ」を用ひる。例へば  
 水 屑 泉 雷 酸漿 渦  
 煩 貧 續 かつ  
 らふ等







庫  
1  
12

広島大学図書  
2000302112  
